

証雅の柳川

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 452

麻生路郎☆主宰

新春号

no. 452

昭和四十二年
一月一日第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）

創刊大正十三年・通巻四五二号



清酒
日本盛

灘 西宮酒造 釀

ニホンサカリ

超特撰 (全糖ケース入) 一、八リットル詰・一、二〇〇円

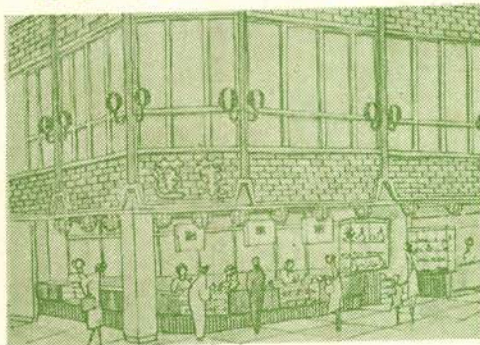


超特撰 日本盛

みがきぬかれた
えらばれ
灘の酒



豚饅・焼売



広 東 料 理

蓬菜

大 阪 な ん ば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアード



国立 奥新和歌浦・雑賀崎
公園

風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

う お ま た ろ
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387

謹賀新春

一九六五年元旦



不朽洞句帖

麻生路郎

姉妹都市いい気になってプレゼント

名誉市民アラもう死にやはったとは

晴耕雨読の元裁判長の白髪しろが

恋という字を老人凝視する

ニコヨン町長てなもんやな いかないかと唄いそう

長髪もよからん神武の末裔さ

うれしさは足踏みをせぬ君なりし

形本氏のオーエスケー新巻書

学生長髪問題で騒ぐ

川柳雑誌新春号目次

★柳	不朽洞句帖……………	麻生路郎……………	弘
樽	新春雑談……………	麻生路郎……………	4
室	これこそ男……………	東野大八……………	18
	御題と川柳……………	北川春葉……………	12
	柳志寸言……………	本多柳志……………	36
	座談会「おしどり夫婦の旅を語る」……………		28
	多久志・榮・好郎・没食子・		
	摩天楼・圭井堂・薫風……………		
	川柳太平記……………	富士野鞍馬……………	20
	現代柳人録……………		18
	川傍柳初篇研究(二二)……………		14
	丸 十府・岡田 甫……………		
	川端 柳風・高須嘸三味・前田喜代人……………		
	岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄……………		
	大万川柳「荷かざり発表」……………		40
	方言は郷土の味……………		27
	鮮山・緑之助・白眼子・		
	曉明・阿茶・閑人……………		
	不朽洞の人々……………	丁路氏の巻……………	39
★			
柳	川柳塔……………	麻生路郎選……………	6
同	同舟近詠……………	諸 家……………	21
近	作柳樽……………	麻生路郎選……………	22
人	生 譜……………	北川春葉選……………	32
金	泥 集……………	河野春三選……………	35
各	地柳壇……………	麻生霞乃選……………	41
柳	柳界展望……………		
入	門 講 座……………	(38) 不朽洞会から……………	39
		清水 白柳……………	34
	一路集……………	弘津柳慶選……………	36
	拾い屋……………	橘高薫風選……………	36
		辻白溪子選……………	46

元気でいこう
元気をつかむ

疲労・肩こり・神経痛

結合新活性ビタミン剤

ノイビタ®



フジヤフ

新春 雑談

麻生路郎

まあ、あがれ、きようは少し暇があるから、雑談をしよう。ワシの言うことは学者の意見でもなければ、市井人のムダ話でもないから、そのつもりで聴き給え。

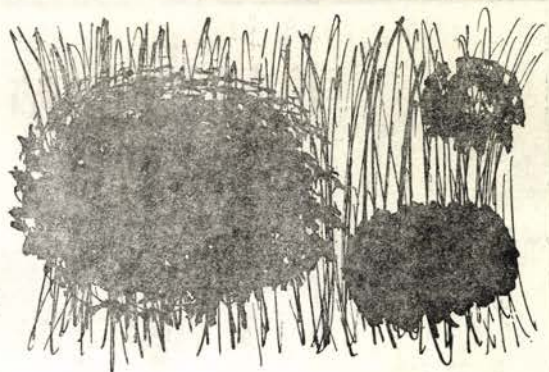
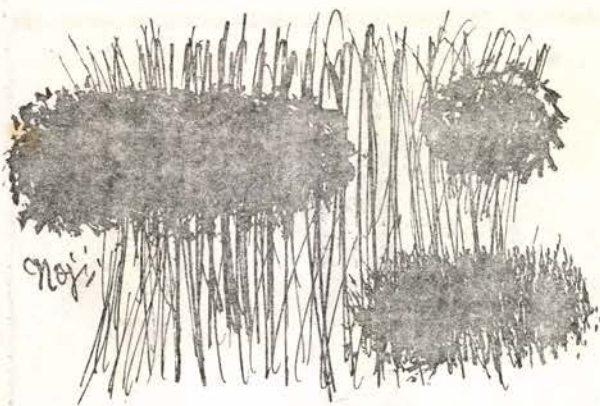
ワシは科学には、弱い男だ。しかし、物事を慎重に熟慮する。斯うと決まったら、ワキ目もふらず断行する。ワシは専門家主義だから、科学なら、湯川博士にでも聴き給え。ワシはカンで生きている男だ。ソロバンもカンだ。それだけに、何んでも体あたりで生きているのだ。

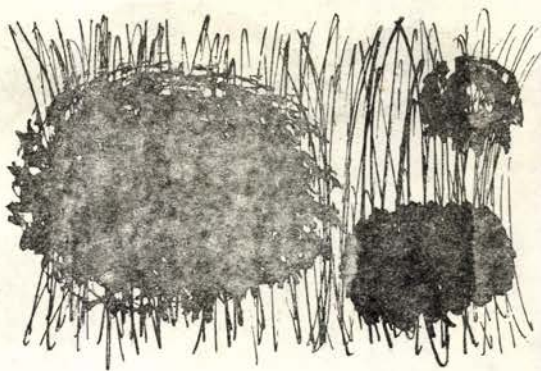
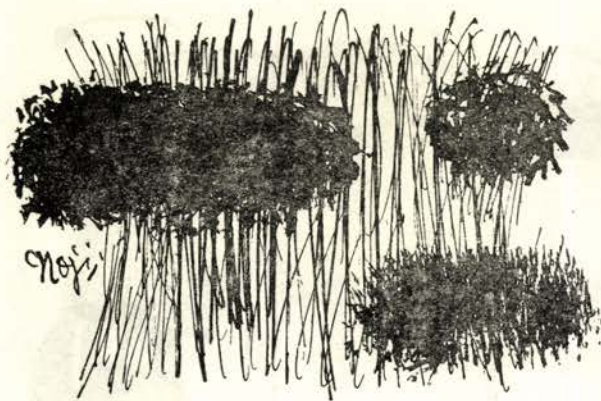
池田前首相が、経済のことならワタシにお任せ下さいと言って、所得倍増論を打ち出したときに、一番先に、アハハと笑ったのはワシであった筈だ。彼の倍増論は統計を根拠にしての経済論だからだ。統計を基礎にしての論はいかにも合理的のように世間からはうけとれるが、厳密に言って統計ぐらいアヤフヤで嘘バ

ツチのものはないのだ。全国から集めた統計は、お互いが自分の或いは自分の会社のご都合次第でソロバンを弾いて出来上がった報告の集成に過ぎないからだ。

という証拠を、判りよいように君に説明してやろう。たとえば君の所得がどのくらいあるかと、税務署吏員が聴いたら、懸命になって低所得を主張し報告するだろう。ところが、君が結婚しようとする相手から、幾ら所得があるかと聞かれたら、忽ち高所得であることを吹聴するだろう。これは個人でも会社でも同じ心理が動くものだ。だから統計というものには数のマジックであって、真実そのものではない。どっちにでも転ぶ統計という物尺で、所得を解釈するとマコトに味気ないものだ。会社の財産でも、重役の頭一つで、儲かっているようにして、タコ配をしようと思えば、役にたたぬ機械まで財産として、計上するし、赤字に見

せようとすれば、多少役立っている機械まで、消耗品として落としてしまうわけだ。これをワシは数のマジックと言っている。池田さんの所得倍増論なんて全く数のマジック以外の何ものでもないのだ。経済の成長率がどうの斯うのと、統計をもとにして、議論しているのはチャンチャクおかしい話だ。統計がどうして出来あがるかということを知らぬ人ならゴマかされるかも知れぬが、ワシなんか、そんな統計を根拠にした意見を述べているような男には笑っておくだけだ。そんな男は大学を出て、役人をしただけの経験しか持たない男だと思えば間違いない。小林一三や松下幸之助のような世の荒波にもまれて来た人の前で、成長率がどうの、指数がどうのという意見を述べたところで、ああ左様でございますかと軽くあしらわれるくらいのもんだ。何かを経営しようという人はことごと





反対はせぬが統計をまる呑みにした意見が最上の方法だとは思っていない筈だ。

水がH₂Oだというのは学者の世界の話だ。それに間違いないだろうが、純粹の水、即ち蒸溜水を飲んで甘い水を飲んだと思うかね。イヤサ、酔いざめのH₂Oではノドを通るまいではないか。酒をつくるのに灘では宮水を昔から使っている灘で蒸溜水を使って酒を醸造している話は聞かないからね。

科学的に造っている酒より、灘の酒の方が甘いのはどういう訳かね。考えて見る必要があるだろう。

新幹線の電車が東京から大阪へいくら早く着くと言っても早くつくだけが目的なら、それもよからうが、東京から大阪までの旅の味が、それで味わるわけではなからう。鈍行の電車であつてこそ、はじめて旅の味を満喫することが出来る。そんなことはワシが説明するまでなからう。

ワシは食事をするのに、コレを喰べなさい。コレはBがどうの、Aがどうのと老妻から、薬屋の手先みたいなことを聞かされると味が素つ飛んでしまう。一々科学的解説は要らないと思うのがワシだ。それより、今日は鯛ちりですよ。寒いからスキヤキにしました。と言って呉れる方が、なんほいい気持ちになれるか知れないのだ。科学過剰はいやだね。

セックスの問題にしろ、妻の美醜の問題にしろ、一々科学的解説をしなければ

ならぬような人間は人生を享楽する資格はゼロだと思ふが、どんなものであるう。うちの妻君はヒップが何センチあるか、何センチ以上ないと感じがないとか、悪るいとか言っている人はおそらくあるまい。スモッグがどうの斯うのと懸命になって研究している人があるが、その人が、ベターハーフのからだを科学的に研究して、ヒップが何センチしかないから離婚したという話は聞いたことがない。ワシはそうした大雑把な世界があるのでもいいと思つてゐる。太ったワイフには肉体の豊満さに満足すればいいし、スラリとした女性には、歌麻呂式の美を感じることが出来れば、それでいいのではないか。

月に達するようなロケットを打ちあげるのは、その人の自由だが、ワシは秋の夜の月を静かに眺めて、一パイ傾ける方に生き甲斐を感じているのだ。そんな時に科学を持ち出されたり、統計で話を進めようといわれると全く興ざめたな。ワシの新年吟に

初日の出自由はここにあらるものを

と、言うのがあるがワシはこの初日の出を科学的に解説してもらいたくないのだ。

凡聖一如元旦のころ知る

というのもあるが。

この句には人間性を見れば、それでよいのではないのか。

正月も昔は紫雲たなびいたと、いう句もあるが、近頃流行りのスモッグではチツとも新年らしい気がしないではないか。

科学と取組んだ人たちは、それが宿命であろうから、やるだけやるの多いが、科学の外に生き、科学を意識しないで、感覚的に生きてゆけるワシは幸福だと思ふね。

考えて見たまえ。機械文化が自動車を生んで、安んじて散歩する道さえなくなったあわれな人間の姿を……。

スピード化は旅の楽しさを消し飛ばし、仕事と称して、キリキリ舞っている姿に、どこに幸福があるのか。考えるまでもないであらう。

少し説教じみて来たから、これ位で止めておこう。また君の「酒は呑め呑め呑むならば」でも聴かしてもらおうか。

結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣裳も
豊かにそろえております ● 6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

麻生路郎選

信号を黄で駆け抜けて得した気

自家用車の人が一番おくれて来

大阪市 後藤 梅志

見てくれというエンジンの音をさき

力這入らねば老女さえ演れず

死刑かと騒がせていて無罪なり

ハワイ 羽佐 周柳葉

常識の有無学歴と別だった

性格の差をネクタイの柄に見る

母だけが子の我儘に耳をかし

落目とは哀し友まで背を向ける

堺市 吉田 圭井堂

手形明日落ちつきのない朝の膳

やりくりも自然に習う小企業

ガラス張りですと裏ではこの汚職

禁酒さす医者ならよせとのみ仲間

防府市 長野 井蛙

涸れ果てた涙が悪女に仕立て上げ

失恋の痛手笑わぬ娘にvari

定年を囑託にして飼ひ殺し

岡山県 直原 七面山

浄瑠璃に耳傾けぬ程若し

大阪市 市場 没食子

長男結婚

巢立ちする姿も父に生写し

懸崖と並びポーズをとらされる

良い方の例に妻されてれている

パラリンピック序のような感じもし

人手不足ゴミ箱あさる人あるに

電機器具だけは親よりまだ揃え

西宮市 若本 多久志

自信なきバンクのドーバー重いこと

よい風はちっとも吹かず十二月

カーブム売ってる方も不安なり

金つまりおでん恋しい十二月

高槻市 若柳 潮花

冷え切った部屋へ戻って灯をともし

再婚を笑って逃げるほど疲れ

若柳 義舞踊会 雁より

浮世絵のなかなる君と思う灯か
年の瀬を扇で稼ぐ足袋を履き

兵庫県 小西 無鬼

としよりの下手なベレーも可笑しけれ

表彰状尻こそばゆい人も居り

田谷力走

上がる日の丸そして国歌ヘジンと来る

ガルナナングの独走

スポーツマンシップが後から独り三周す

大阪府 西 いわを

建売を値切るとこまで行かず聞き

代弁をして気を使うのも女親

潮花氏へ

大年増近寄り難き舞扇

大阪市 北川 春巢

普茶料理いちいち聞いて箸をつけ

年齢も書かねばならぬアンケート



生きている証拠を試し合うキッス

美辞麗句を女やっぱり嬉しがり

金と暇出来て浮気も板につき

師匠になって余興には出ず

鳥取市 河村 日満

台風が予報どおりにきて荒し

アベベばかりの画面NHKくさす

優勝が近く陛下の顔が見え

倉敷市 木村 千容

休職の切れ目へ焦る病み呆け

損得はちゃんと知つとる病み呆け

踏み石の如く落付はらつて

算盤の通りに家は建たなんだ

清潔な人柄だけど次点です

倉敷市 田垣 方大

波ざぶん抱くきつかけがつくられる

社長の友人に家来扱いされ

お社をなまめかしくして舞妓立ち

加賀市 野村 味平

医者からも手放されてる金づまり

うんざりの世情へ池田辞めてゆき

薄情とどやされたのは背のこと

大阪市 木村 水洞

スポンサーの差で総裁の椅子決まり

審査委にコネがないので選にもれ

定命は天に任せて枸杞に凝り

親も子もキッスに馴れて来たテレビ

高槻市 福田 丁路

美しい花の心も知らず折り

岩を噛む流れを飾る枝つ振り

尋卒の社長ゴルフに縁がなし

あのおばはんが二号とは知らなんだ

寝もやらす子を持つ母の風邪っ気味

丁寧にお叩頭をしたが横向かれ

米子市 小西 雄々

根性のない失恋をいたわらず

セーラーを脱げば女体の線をもち

勉強を子に強いテレビ見る夫婦

大阪市 山川 阿茶

税務署の増築二重に腹がたち

下駄歯入れ繁昌さすがは島の内

加賀市 那谷 光郎

ポケットにガム忍ばせて警部どの

I・L・O又その意味を忘れたり

明治昭和衝突したかい君ととも

浪費癖意志の弱さを妻なじり

大阪市 福井野 迷路

宴会の終りは脱兎の如くなり

痛いところ突かず黙って下を向く

下関市 桜川 不水

悪人もみ仏となる息を引き

秋の陽にせき立てられて稲を刈り

岡山県 浜田 久米雄

お雑煮の湯気はプロバングスになり

ボールペン冷たいこゝろかすれて来

元旦へこゝろ豊かに墨をすり

正月へ抗議わたしはまだ老いず

大阪府 清水 白柳

詩をつくる女はうすい紅を刷く

うつむいて仕事している日本晴

制服で来てコスモスが好きという

出雲市 尼 緑之助

再建の鐘楼二十年ぶりの鐘

人権の否定のように交通禍



大阪市 水谷 竹莊

村平和酒豪番付などつくり

静けさをほめていたゞく普茶料理

西宮市 若林 草右

新家庭相性などは気にもせず

広島市 弘津 柳慶

ただ一つ女ですと云う左前
聖火運ぶだけのコーチも選ばれる

单身赴任夕めしの味気なさ

スターもう離婚の噂立てられる

高槻市 山田 季賛

倒産をよそに首相は椅子を下り

十一月三日京都御所にて

京都市 大鶴 喜由

御所へ来てボロ靴をまだ踏まれ

家をささえるホステス許されよ嘘

はちきれそうな肌と梨の丸さと

岡山県 田村 藤波

相聞の仮設の中で詩人酔い

尼崎市 小林 文月

御所拝観我が子へ見せる肩車
がんとして都会へ母が移住せず
老夫婦柿の高さに腰を伸し

同窓会で死んでた友が礼に来る

南海難波駅にて

見島市 本田 恵二朗

あの柱この柱のもデイトらし

あと十米車掌の笛は容赦せず

小豆島にて

門真市 福島 鉄児

巡礼の姿でバス待つ小豆島

コンクリートの割目で鳴いている虫よ

ラッシュアワー女の髪にくすぐられ

紀伊勝浦へ妻と旅する

岡山市 服部 十九平

堺市 高崎 雄声

長男の無欲を母がはがゆがり

村医者に誤診をさせた肌の艶

前の車調べてる間に違反逃げ
子ができて無口な嫁がよく喋べり

我身乍ら孫の相手のおかしくて

島根県 藤井 明朗

娘の料理習ったままの味をつけ

邪魔くさい返事と知らぬ長話

よっぽどの機嫌か音痴歌い出し

余命幾年一年の早かりし

倉敷市 野田 素身郎

絶景へバスの運転手は必死

廃屋の庭の柿の実があかい

愚痴も出るだろう共稼ぎ五年

唐津市 新岡 回天子

心上を吐露すればよし眉かたち

岡山県 池田 古心

収獲を急いでも行く当であるなし

芦屋市 丸川 初甫

曲り角に来てても野心捨て切れず

大文字見る気の妻も小ジョッキ

大阪府 早川 清生

地方紙を送らせ選挙区には住まず

授賞の日女流作家は和服でい

近所睥睨して酌婦だった後妻

大阪市 橘 高薫風



十月二十六日長男充 誕生

出雲市 原 独仙

オイチョカブ晩飯の金みな奪られ

愛媛県 村上 旭童

わが子男子旭の如きまる裸
産ぶ声のはっしはっしと聞えける

一茶忌の赤林檎より青林檎

灯を消せば弥勒女菩薩毛糸編む

神戸市 仲 どんたく

もう天に居る顔花に埋もりて

ウエルカムヘワンダフルだけで素通りし

又ノルマふえる社屋が竣工し

松阪行

缶ビールごろごろと鈴鹿越

すすき原鹿を一頭配したく

平田市 久家代 仕男

豊漁にはかゝわりもない祭りの値

通勤の靴が有るのに留守という

税務署に知れぬところへ稼ぎに出

給料日子がピケを張る年になり

大阪市 本 多 柳 志

社説より先に漫才がばやき

お手盛りは歳費丈ではない白書

倅にくらし文楽好きになり

むつかしい世界と知らず跡を継ぎ

グローブを嵌めてでるのに素手で捕り

神話など餓鬼の耳には通じない

祖母が逝き近頃無口な祖父であり

西宮市 野 呂 鶴 汀

歳之差を悲しや金で埋めるとわ

本当に惚れて居るから手も触れず

西宮市 樋 口 舟 遊

浮気女の少したりない嘘となる

蘇鉄花つけ灯台守はいず

新潟県 高 野 不二

大臣は誰がなろうと物価高

明日ばれるうそをぬけぬけ予報官

大阪市 石 倉 旅 風

掌に信じて握るものが逃げ

幼稚園今日の知識をふれに来る

名も知れぬ花を愛して山を降り

善人の夫を承知する苦勞

灸据えてなおつかわんとする生命

大阪市 魚 住 満 潮

続・西成界わい

立小便割勘の酒さめて来る

老いたともいえず出好きをあぶながり
農薬にたえぬいたのはざりがにか
立ち読みで得た智識とはたくましい

鳥取県 福田 多可志

一年を食わせてもらう稲を刈り

オリンピック記録へ

わざの限界見せつけられた体力差

高槻市 傍 島 静馬

沖に出てからは船頭にさからわず

車海老すしになる間を泳がされ

投資するつもりで祝儀弾んどき

とつおいつ座席譲らずじまいなり

銀行も造花で経費切りつめる

大阪府 谷 沢 好 祐

割当てで来た顔も行くデモの列

目迎目送されて美人が下車します

マラソンの期待へ市場客が切れ

青森市 工 藤 甲 吉

あることないこと腹が立つ未亡人

何を物語る女の乱れ髪



税法を恨んでくれと税吏言い

ジンフィズあふり只今別居中
ふるさとはよし日本がまた残り

大阪市 今 西 章 雅

フ首相お年で辞めたにして置こう

救世軍奉仕かサラリーマンだろうか

ピアノ買った時はピアノリストにする積りだつた

京都市 室井 八九寸

白い杖見届けてから踏むベタル

どんぐりの落果と気づく読む夜長

岡山県 横山 一声

信仰の自由神棚焼き払い

イヤリング外して座るお茶の席

勉強は出来ないけれどよく肥り

小松市 関戸 宗太郎

夜の蝶昼は毒蛾のように住み

着任の抱負忘れて角がとれ

貰うより勲章辞退して光り

石川県 高山 涼 髪

落葉掃く母にいいよ柿赤し

鼻の差に妻子忘れた借が出来

しょんぼりと石屋の隅の金次郎

呑みながら貯めたと酔えば自慢する

美禰市 安平次 弘道

執行出来ぬ死刑世論がこわいのか

空っぽの頭だせてめて高く結い

男の眼をひぎに集めている快感

皮肉ぐらいで腹を立てられぬ窮状

空席が目立つ役所の始業ベル

ロッカーにへそくり社長も恐妻家

宇都市 平田 実男

コンドーム相手も固い顔で売り

落書の高さで長女の嘘がばれ

ナイフホーク気にし砂噛む思いがし

真実をゆがめて実話雑誌売れ

諫早市 川岡 霊眼子

兄がやるから弟もやる組閣

横綱の負越し病名つけてくれ

原潜来る

やがてそれ尊王攘夷がまたきます

富田林市 浅川 八郎

科学かなし幻滅の月世界

弱いのか強いのかラッシュの老婆

孫も亦音痴祖父との合唱に

文楽にお供して

お米に生きる亀松の光りすぎ

岸和田市 内藤 きさ子

邪魔くさくなって疑うことを罷め

倒産と判ればケナスことばかり

お好み焼の粉を粘りつゝ友を待つ

値上りをいち／＼云うて夜の膳

青森県 木村 凉人

これも五輪記念か池田さんが辞め

晩秋の雨考える人にする

ここに幸あり糸巻に手を貸して

同年兵会で支那語を思い出し

倉吉市 奥谷 弘朗

たまるのは新聞だけねと妻こぼし

出世なぞ忘れた顔の小役人

兵庫県 遠山 可住

聖火消えて株が下るのだけ目立ち

蛍光灯寿命を考えないで付け

字は知らんけどコマーションシャルもう憶え

兵庫県 河原みのる

東京オリンピック

チャスラフスカ アナウンサーも舌もつれ

女体とは斯くも美し床競技

篠山の郷愁

門長屋また一と棟が除かれて



空けてくれた席としよりと見られとこ

姫路市 隠岐 不醉

答案の名前見てから五点増し

加工品俺もそうではなからうか

鳥取県 清水 一保

世渡りのコツを恩師の方が聞き

三十年前の一四とは知らず

独り咲き独り散り行く畑の菊

出雲市 中川 晃男

嫉妬などあほらしうちも浮気する

亡き妻の座を吹き抜ける秋の風

寝つかれぬ明日は故郷へ着く夜汽車

松江市 柳 楽 鶴丸

匿名の主新聞へ微笑する

門衛にひやかされている迎え傘

京都市 都 倉 求 女

折角のグラビア美人に子が誕

神さまをあなたあなたと聖教は

神風は五輪景気へも吹かず

兵庫県 大江 秋月

正月が子供の声で明けてゆく

ガス切れの電話はパパが頼まれる

老らくの恋を求める湯につかり

大阪府 松田 半月

やれうつな熊は子を連れ女房連れ

ハンターはこの一ぱつに生死かけ

今治市 越智 一水

無駄話毛糸それでも編んでいる

子の声が寒さ運んでくる亥子

へそくりか一つふえてる化粧品

竹原市 山内 静水

親子けんか子無しに羨まれ

伝票の効く食堂へ母を連れ

女の幸福故郷をとうくさせ

大阪市 森川 すみれ

飯らない人を待つ夜のきりぎりす

三面鏡開けば今日の顔があり

ゴシゴシと二人の米をとぐ安堵

ガラス戸をみがけば空も晴れてをり

新居浜市 小林 孝正

コンペアー快調土工酷使され

葬式に来て香水を匂わせる

美しい自信正面切って行く

自ら掘る墓穴の白き白き夕暮れ

鍵っ子の淋しさ夕陽に染りきる

熊本県 有働 芳仙

耳垢をためてる方が持っている

握らせたチップがここでこう違い

母の背が知らないふりをして逢わせ

私の美貌を画家に無視される

仙台市 放 軽部 日東里

マンションの下見サーブス車で出掛け

結構なお日和と社務所世辞を云ひ

湯煙の奥確かめる湯治客

店番を頼んで猫は抱いて行き

若本多久志

西宮市津門西口町五〇

北川 春 巢

大阪市旭区大宮西之町八丁目五七

西 尾 榮

八尾市八尾木八一七

川 村 好 郎

大阪府泉北郡高石町北四六五

松 江 梅 里

大阪市阿部野区松崎町三ノ一〇

春 新 賀 謹

川柳不朽洞会常任理事



京の祇園さんの境内の小島古い（不死鳥撮影）

御題と川柳

北川 春 巢

御題（ぎよだい）とは字引によれば「天皇のご選定になった詩・歌・文章の題」という意味で、戦前は「勅題」といった。戦後は「勅」の字を使うのを避けてか、単に「御題」というようである。広義では右の通りだが、狭義には「歌会始（うたかいはじめ）」の「お題」である。歌会始は明治二年以降、毎年恒例として古式により宮中で行なわれている歴史的な歌会で、正月の中、下旬に行なわれ、当日は両陛下のお歌をはじめ、皇太子、親王、内親王および皇族のお歌が発表される。一般国民がその御題で詠進することができるようになったのは、明治七年からのことである。

昭和二十七年の「川柳雑誌」新春号に路郎先生は「続川柳講座」（26）に「勅題の句について」という講義を書いておられる。路郎先生はの中で、第一回の勅題は「迎年言志」であったといっておられる。また昭和十一年の勅題は「池辺鶴」、昭和十四年は「朝陽映島」、昭和十六年は「漁村曙」だった由で、それらの題によって作られた句も例示しておられるが、所詮それらは歌の題であって、川柳に作って見た所で、川柳味の稀薄な、いわゆる短歌らしい川柳になってしまい、机上の作文になってしまっていることを述べておられる。

一般の川柳作家（私をも含めて）は、このような御題には無関心であったようだ。ひとつには路郎先生の云われている通り、川柳に作って見た所で大した句はできない。と思っただけからかも知れない。ところが終戦後になってからは、歌会始の選者が旧派歌人から現代歌人になり、それに伴って入選歌にも生活感を帯びたものが多くなった中で、歌も質的にやや変化して来た。そのせいかどうか、御題も今までは変わら「雲」だとか「光」だとか「土」だとか、今までの漢文調の題から、生活に關係の深い題が出されるような傾向になった。こんな題であれば、川柳句会にでも出題されて作れぬ題ではないと思われる。それにも拘らず、私自身のことを云って恐縮だが、「御題」には比較的無関心であった。ただ例の詠進歌事件以来、俄かに関心を引くようになったことを白状しておこう。

私はかつて昭和三十四年の「川柳雑誌」新春号に「年賀状に見る新年吟」という一文を発表したことがある。その中で私は、年賀状に新年吟の一句を書き加えることを川柳作家の心構えとして頂きたいと述べ、それまでに発表された新年吟を例示したのである。私は新年吟を四種類に分類し、そのひとつに「御題」にちなんだ句を書いたものもあることを見てもらった。もちろんそれは盗作事件以前のことで、今その文を読むと例句には昭和二十八年の御題「希望の船出」が引いてあった。

さて今またこの原稿を書くべく、古い雑誌を引き出し、また古い「川柳大阪」の諸家新春句集編を繰って何か例に引くべき御題の句がないかを調べてみた。

昭和三十三年に
少し貯めたらというころ雲
の如く漂う
路郎
雲に名があり老船長の口伝
鞍馬
七合目あたりの富士を巻いた雲
黙平
大ジツト雲を見詰めて心足る
水客
京の雲五重の塔にひっかかり
薫風子
など、多くの「雲」の句が見付かった。御題が「雲」であったかどうか記憶にないのだが、恐らく雲であったのだろう。これは私の想像であるから、間違っていたら

謹賀新春

岩崎愛二

京都府乙訓郡長岡町
梅ヶ丘二丁目三十八番地
電話京都二九七四番

長野元一（号・井影）
山口県防府市大字西佐波
合字幸地一三一六ノ一六

米沢 曉 明
愛媛県大洲市
常磐町九一番地

川柳雑誌社阿倍野支部

事務所 阿倍野区松崎町3-10（松江梅里方）

今西章雅
泉 竝 悦子
井上つる子
本多柳志
金井文秋
河井庸佑
桑田嘉代子
菊沢小松園
松江梅里
宮尾あいき
小川恒明
辻川喜仙
柳生野菜

ご教示願いたい。ただ「犬ジツト」の句は、昭和三十三年がイヌ年だったので、イヌにちなんだ句と見てもよいが、とにかく「雲」の句が多かったのは事実である。昭和三十四年の御題は「窓」であつた。これは間違いない。

福の神入れる窓から風邪を引き

一声

新春の窓た恵方へあけ放ち

伍健

「窓」の句は、路郎先生が講座に引かれた句よりも、よほど川柳味があり人間臭があるといつてよいだろう。「窓」が人間生活に関係が深いといかも知れない。

昭和三十五年の御題は「光」であつた。

生きのひて仰ぐ空あり日の光

伍健

空に照る光科学の秘秘めて

黙平

これらの句は、前の「窓」よりも人間臭にやや乏しいうらみがある。また伍健氏は同年二月に脳溢血のため急逝せられたが、今思えば「生きのびて」などという句にはその予感があつたのかも知れない。「空を射る光」よりは人間臭を感じるのである。

昭和三十六年の御題は「若」であつた。「若」などという一字の題は川柳では作りにくい。

若草のさざめき居たる雪の下

若菜

という句が見当たつたが、これは俳句調である。この年、「教育大阪」という大阪市教育局から出ている雑誌から御題「若」にちなんで一月号に何か書いてくれと頼まれた。その前年の十一月頃である。私はもちろん川柳の「若」を書いたが、新年吟ができていたわけでもなく、古い「川柳雑誌」から「若」の句を探して発表し若干の説明を加えたのであつた。これらの句を左に記してみる。

麦を踏むリズムマンボになる若

さ

裕邦

遮るものみな除けようとする若

さ

妖人

そこへ行くようにモスクワへ行く若

く若さ

路郎

ホームバーにも輪飾りをして若

し

一十

私は誰でしょうと電話口若し

明林

いずれも御題などという堅苦しいものを意識した句でないだけに、川柳としての味はずっとすぐれていることはお分かりと思う。

なお、昭和二十五年一月一日からは「年令」となえ方に關する法律が施行せられて、それまでは「教え年」で年令をとなえていたのが、「満年令」でいうことにな

つた。今までは正月に年をとっていたのが、それからは誕生日が来なければ年をとらないことになった。従つて、一月一日に生まれた人以外は、一月一日には年がひとつ減つて若返つたわけである。川柳作家はそれを見逃すことなく、昭和二十五年の年賀状には「若返つた」句が見られている。

属蘇やよし八千万が若返り

義久

ひとつ若くなつて嬉しい雑煮餅

香林

これは「若」の題で作つたわけではないが、「若」の題で作られた前記の新年吟よりもはるかに川柳味があると思われるのである。

昭和三十七年の御題は「土」、

三十八年は「草原」（くさはら）

三十九年は「紙」であつたが、い

ずれにも見るべき新年吟はなかつたので例句省略する。路郎先生も

最近では御題の句は発表しておられない。御題では余りよい句はできないとあきらめておられるのかも知れない。

ほんほん紙の裏表も知らず

春葉

これは「紙」だが、御題で作つたものではないことを申し添えておく。

昭和三十四年「窓」の御題発表の歌会始を陪聴された詩人の村野

四郎が、その様子を朝日新聞に書いておられるのを読んだが「時代離れした嚴かさ」といつておられた。先ず入選歌が発表され、講師が第一句を発声すると、つづいて数人の講頭（こうしよう）がゆるやか唱和で披露する。作者は「福島県安田の健治」である。この年はおかっぱの高校生「垣内の和子」さんの歌も入選した年である。召人の一人には「日本芸術院の会員、佐藤の春夫」氏もはいつていられた。皇族の歌は二回、皇后のは三回、天皇のは五回、唱和された由である。昭和三十七年からはテレビで中継放送されるようになったので、視聴された方も多

いと思うが、残念ながらこの年に盗作事件が起きたのであつた。

路郎先生は前記「勸題の句について」の中で、川柳作家に対しては川柳的の出題をされて、庶民の生活なり心情を詠んだ句が発表され、それが天皇のお耳にはいることにはかない望みを托しておられたが、「麻生の路郎」や「北川の春葉」などという名前がスピーカーから流れる時代が果たして来るであろうか!!

今年の御題は「鳥」であるが（これもこの稿を書くために調査して分かつたのである。）どんな作家がどんな新年吟を発表するであろうか、楽しみでもある。

謹賀新春

川 雑 豊 中 支 部

戸田 古方
黒川 紫香
村上 ゆずる
竹内 圭三
小池 しげを
永藤 弥平
菊田 いさむ

謹賀新春

吉田 圭井堂

堺市浜寺昭和町二丁目三〇
電堺③三〇五四番

林 野 魁 光
呉市吉浦中町二丁目

川 雑 米 子 支部 松露川柳会
小 西 雄 々
米子市富士見町一三五

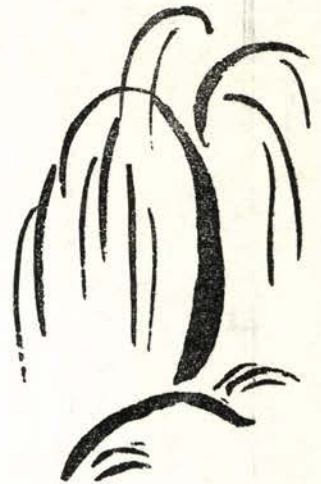
薫 風 子 改メ

橘 高 薫 風

大阪市北区堂島上二ノ五二

浅 川 八 郎

富田林市彼方三三一



川傍柳初篇研究 (二二)

丸 十 府 高 須 啞 三 味
岡 田 甫 前 田 喜 代 人
○ 岡 崎 重 義

川 端 柳 風 藤 井 和 雄

258 鬼すだれはつして琴のはらい物

五 扇

前田「鬼すだれ」は、太い昔で荒く編んだすだれ。吉原仲の町の引手茶屋等が、つるしていた。うらぶれた生活模様を詠んだ句。

鬼すだれしようきは見へぬ仲の町

(タル五二)

岡崎「琴を払いものにする、というの」は、娘の死んだことを意味しよう。

清「岡崎説通り、娘が死んだのである。」

死んだ娘の年は十九歳?

鬼すだれ涙のかゝる忌中札

で、このすだれは、葬式にも使われたものである。

藤井「三味線が二挺と琴の払いもの」

と同じく、十九歳で死んだ娘の、琴の払い物で、両親の思い出の種を売ったのだ。

高須「鬼すだれ外して」だから、葬儀一切済んでの意である。——もちろん、

目につく思い出の多い娘の遺品を「払った——売り払った」のである。凝った表現の、ちよつと頂ける句である。

丸「賛。情のある佳句。」

岡田「同。」

259 俄雨ミリンをのミに寄るやつさ

長 笑

前田「俄雨(夕立)に雨宿りの句は沢山あるが、飲食物をとり入れた句は少ない。」

うまそうに食ふを見て居る雨やどり

(タル二三)

雨舎茶瓶にかりて吸付る (タル二〇)

雨やどり鯉をいじり叱られる (傍四)

等がある。この句、酒屋に雨宿りしている下戸を、上戸の雨宿りが「味淋のみに寄ったのさ」と、馬鹿にしている句であろう。上戸の得意そうな風ぼうが出ていて、面白いと思う。

清「俄雨、雨宿りの句は、非常に多い。それは、当時交通機関も発達しておらず、

雨具も簡単に求められなかったため、出先の俄雨には相当困ったらしく、その強い印象が、多くの柳句をよぶ原因となったものと思う。

藤井「上戸が、下戸を、ミリンをのみに来る奴と侮蔑した所とは、わかるが、俄雨と結びつかぬ気がする。」

高須「柳雨翁は「女ばかりの家にはなさか」と言っている。——雨宿りだから、男が女世帯へとびこむことだであらう。だが、それだからとて「ミリンをのみに寄った」ことにはなるまいと思うが……。」

丸「俄雨に、これ幸いと、近くの岡場所などにとびこんで、ひとときの甘い酔い心地を味わう手合いではある……と一応解したが、「ミリンをのむ」は未調査である。當時成語として、特殊の意味「ひとときの逢う瀬を楽しむ」というような意があったのではなからうか?」

岡田「礎稿に賛。デパートのような、雨宿りに便利な所なかった当時では、とっ

さの雨宿りに、呑めない男でも、呑み屋にとびこむ場合だってあった。

260 牽頭持くやミに来たがはじめ也

秋 紅

前田「牽頭持」は、太鼓持、幫間のこと。太鼓持の起源は、能の脇師、相撲取、唐物屋、髪結師などが、この役割をした。(江戸中期、明暦)が、宝暦以後は、下司な踊り、狂句、じやれに通じた専門的な太鼓持が現われた。——句意は、よく吉原で遊んだ父が死んで、そのくやみに太鼓持が来た。それが機会となって、その息子もまた同様に遊ぶようになった。ではないか。

岡崎「賛。幫間と息子の結びつき。」

高須「調子のいい太鼓持が、家に来たのがいけなかった。それに誘い出されて、息子が遊び出した。当の太鼓持は「くやみにうかがっただけ」というが、やっぱり親の子であった、わけか?」

丸「息子の遊びも、親の目が光っている間は、かくれ遊びで(もちろん親は知っていたが)太鼓持など家に来たことはないが、親父が死に、太鼓持がそのお悔みに来たのが、そもその始めで、以後はお出入り勝手、息子の遊びも誰はばかるところなく公然、となった、と私は解する。死なれると太鼓三日にあげずに来

(タル一一)

261 岡田「丸先生の解通り。」

待わびる耳へ蛙の声斗り

眠 狐

前田「吉原で、客が遊女を待ちわびている句。付近は田圃に近く、蛙の声が聞こえ

て来る。「声ばかり」が、そゝろさびしくひく。もてない客の一つ。類句が多い。

しやば中が寝しづまったにうせぬなり

(傍一)

もてぬやつ拾鐘までもよく覚え(拾七)

鶏もなけ鐘も鳴れ鳴れ振られた夜

(タル三〇)

けちな晩尺取虫のやうに待ち(宮二)

岡崎Ⅱ賛。野暮な振られ客が、足音を待ちわびている、のだが……。

清Ⅱ永井荷風の「里の今昔」に「當時、遊里の周囲は浅草公園に向ふ南側、千束町三丁目を除いて、その他の三方には昔のままの水田や竹藪や古池などが残っていた」と記されている。これは、明治中期の吉原を描写したものだ(「昔のまま」が江戸時代と考えてい、だろう。

川端Ⅱ賛。浅黄客の状態句。

高須Ⅱあえて野暮客、浅黄客と言わず、この心理は、遊客共通の心理であろう。別段佳句でもないが、何となくワビしさの出した味わいの句と言えよう。

丸Ⅱ諸説賛。

岡田Ⅱ遊客心理賛。

(16才)

262 余の町とちがい雪盗金にする

五扇

岡崎Ⅱ吉原の雪見。ほかの町では風流な雪見だろうが、吉原では

初雪は時を定メぬもん日也(タル二〇)

で、遊客に散財を強いる。散財させられる方は

土手の雪かねのわらしの跡ばかり

(タル二一)

の吉原通い、というわけ。

清Ⅱ賛。雪見を口実に、遊客がくり込むため。

藤井Ⅱ岡崎説の参考二句により了解。小生は八朔の紋日かと思つていた。

高須Ⅱ「吉原」のことを「余の町とちがい」と言つたのだが「金になる」ではないから、どこまでも吉原が主体でなければならぬ。「まァ、い、雪だよ、居続けしな」なんて調子で「金にする」のである。

前田Ⅱ「余の」を使った古川柳はかなりあるが、この句

余の後家とちがうと孟母はりのける

と同様、調子のよい響きをもっている。

丸Ⅱ諸説賛。「余の町云々」が妙。

岡田Ⅱ確稿の「遊客に散財を強いる」は誤解。吉原にそういう事実はない。隅田河畔の雪見としゃれこむ風流心が、とんだ方面へ風流心を発揮してしまい、初雪の時は案外に客が多い。だから、吉原にとっては移き時だというわけで、引用の句は、紋日と同様だといったものである。句解は、高須説のように、思いもかけぬ雪だから、帰るのに大変だ、居続けしろと強いる。客もその気になる。すなわち、雪までが吉原にとっては儲け材料となるユエンである。

263 やね舟のへさきへ立てのびをする

葉十

岡崎Ⅱ頭のつかえそうな屋根舟に座つていて、たまにヘサキへ出ると、押さえがとれたような開放感で、大きく伸びをしてみ

る——実景句。

川端Ⅱ屋根舟というのは、花見、花火見、納涼、雪見等に、芸者を連れて乗った遊び舟で、屋形船よりも小さな舟である。情景句説に賛。

高須Ⅱ確稿に賛。トモには船頭がいるので、客はヘサキへ出るより仕様がなない。ヘサキは舟の進む方であるから、自然万歳の形のノビがしたくなる。面白い句である。

前田Ⅱ平凡であるが「のびをする」が利いている。

丸Ⅱ賛。

岡田Ⅱ同。——但し、高須説「トモには船頭がいる」は誤まり。屋根舟は、屋根の上で漕ぐので、船頭はトモにはいない。漕がない時は、船頭は屋根の上で寝をべつていたりする。当時の絵を見ると、それがよく判る。そうゆう点で、時代の版画など沢山見る必要がある。

264 桃の木を上田へ包む子ほんのふ

門柳

岡崎Ⅱ「上田」は、信州上田城下で書いていた紙で、小杉原の一種。一帖七文の安物。主として鼻紙に用いたが、とくに使いの者への祝儀などに用いられた。そして、桃の葉は暑気除けに珍重されたが、その桃の苗木を貰って、根を上田紙で包んで、持ってくる、という句で、親の愛情も過ぎると、親馬鹿・子煩悩となる。

藤井Ⅱ「桃の実を」なら判るが「桃の木を」でよく判らぬ。確稿のように「根を包む」とすれば「子煩悩」が遠い気がする。何か外にありそうだが……。

川端Ⅱ「桃の木」は玄徳・関羽・張飛の

三人が義兄弟の誓いをした「桃園」の異称であろうが、「上田」がよく判らぬ。真田の六文銭を利かしたのか？ いずれにしても、兄弟仲よく力を合わせるように、親が願う意味を含む句と思うが、親の生活が、故事にならうほどよい暮らしでない所に、親馬鹿が感じられるのである。

高須Ⅱこの句、何かありそうで、実は何にもない句と思う。あまり持つて回らず、素直に確解に従いたい。

前田Ⅱ「上田」は岡崎説賛。「桃の木」は、雛節句に使うものにとりたたい。元来、仙桃ともいわれて、桃は薬の果実として尊ばれ、花は節句用、葉は暑熱用(あせも、ただれ等に用う)と、いろいろの用途を、総合的に考えて、単に桃の木を、上田紙に包んだ、ととてよいと思う。

丸Ⅱ節句前に、どっかで貰うか、折り取

かした桃の木を、上田紙に包んで、子のために持ち帰った。といっただけの句と、私は簡単に解している。

岡田Ⅱ確稿に賛。粗末な安い上田紙に包むのだから、根のついた桃の苗木と思う。桃栗三年柿八年で、やがて花が咲き、三年たてば実がなる。子供がさを喜ぶであろうと、子の成長のさきまで考えて貰ってくるのだから、この親、子煩悩の最たるもの、という句である。もちろん、その子は女の子であろう。

265 娘の顔を見つめると立て行

秋紅

岡崎Ⅱ娘は芳喉で、命旦夕というところか。もう助からない……と泣くのに、座を立って行くのは、母親であろう。

清江労働ではなからう。見つめたのは男で、男にじっと見つめられた娘が、何やら気はすかしくなつて、逃げるように、その場を立つて行く、というように考へる。

藤井二岡崎説は母が立ち、清説は娘が立つ。だが、私は「見つめる」がアクティブに働いていると思うので、娘が立つ後説をとる。前説は考へすぎと思う。

高須二清説が動かぬと思うが、この句の読み方について、疑点がある。柳雨本は娘の顔を見つめると立つて行くとなつてゐるが、現代のボクらなら娘の顔を見つめると立つて行き

と作るのが普通である。この句は、どつちに読むべきであろうか？（この問題は前にもあったし、此後もあることだから、一度ハッキリしておく必要があると思つてとりあげた）岡田先生いかゞ。

前田二清説でない「見つめると」が利かないと思う。

丸二清説に賛。

岡田二同。――なお高須兄の質問、小生も「立つて行き」説で、岩波文庫の索引にも、そうしておいた。こういう場合、在来（普通）川柳では連体形で、連用（終止）形は取つていない。柳雨翁が、何をよりどころに、連用形にしたか、高須兄に判らなければ、私にはなお判らない。

岡崎二なるほどと、諸説に脱帽。確稿は考へすぎであつた。

266 三味線箱からと、だのあんもだの

岡崎二子持ちの踊り子の土産物で、「と」とは魚の小児語で、この場合「魚の玩具」であろう。「あんも」は餠餅で、それらを三味線箱に忍ばせて、子供に持つて来てやったのであろう。

清二賛。春を売って、すさんでいる身体でも、母性愛は失われていないわけ。

川端二賛。魚の玩具ではなく、箸をつけない客の膳のもので、哀れを感じる。

高須二子持ち芸者の句で、川端説の如く客の膳の物だの、餅菓子土産に持ち帰るので、寂しく家に待つ子への憐憫である。

前田二賛。「と、だのあんもだの」が切実で、面白味をもっている。

丸二同前。

岡田二同。三味線箱の中へ入れて帰る、というのが、切実で面白い。

267 玉だれの内へ茶めしをくつて入り

鼠弓

岡崎二奈良茶飯は、川崎大師前の亀屋、万年屋など有名だったが、その茶飯を食つて、大師様に厄除けのお参りというわけだろうか？「玉だれの内」が判らない。

清二駄駄解だが、吉原の泊まり客が、翌朝引手茶屋へ戻るところを詠んだ句、と考へている。即ち「玉だれ」は御簾のことであり、茶屋はこのすだれをかけていた。突っぱった簾の内を呑んでいる

（後出634、37オ）

は、これから遊びに行くところを詠んだものであるが、この「簾の内」が即ち「玉だれの内」であり、引手茶屋である。

「茶めし」は、泊まり客が遊女屋で食べた朝めして「遊子方言」（田舎老人多田翁、明和年間）に、泊まり客が茶めしを食べるところがある。

通り者「これ新や、茶づらせう」新ぞう「何、けづらせうとかへ」通り者「これさ、そんなにしゃれずと、早く持て来やな、のう色男、ちくくり茶づつていこじゃないか」むすこ「あい、よう御座りましよ」部屋持「もうお帰らんすかへ」

以上で、泊まり客の引手茶屋へもどるところと解するわけである。

川端二「玉だれ」は謡曲「おうむ小町」の歌詞の「……玉だれの内ぞゆかしき」の文句取りと思うが、こゝでは邸と解して、腹ごしらえに茶づけを食つて、吉原へくりこむのではないか？

高須二諸氏は廓吟にしているが、ボクは「貧乏公家」と言っている柳雨説を、面白と思う。たとい「茶めし」ぐらいしか食えなくても、住む所は「玉だれの内」といふ、哀れなおかしみである。

前田二「玉だれの内」は、川端説に賛。

「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの内やゆかしき」の「内や」を「内ぞ」に変更して返歌したというおうむ小町（謡曲）からの着想。「茶めし」は、岡崎説の如く奈良茶めしの略で、奈良茶とも言い、豆類を入れて茶で炊く奈良地方の郷土食。

茶飯炊きながら押入れ片付ける

（後出318、19オ）

茶飯が過ぎて三重が苦しさう

（同386、23オ）

以上から推して、茶飯で腹をこしらえて御簾内へ入る、素人義太夫であらう。

丸二前田説賛。落語の「寝床」ではないが、聴衆をかり集めて、奈良茶飯を馳走して、義太夫とか講釈を聞かせることが行なわれた。舞台は、前田氏引用句のように押入れなどを片づけて、臨時の高座にした。

押入で扇で湯などはりこぼし

（後出397、23ウ）

は素人講釈、主題句は、素人義太夫の場合である。

岡田二これは、素人芝居であらう。ノド自慢の義太夫をやる男が「簾をかけねえとどうも感じが出ねえ」などと本式の歌舞伎よろしく道具立てをさせたのは、い、が、ま

品質優良
タチカワペン
TACHIRAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ両紙
立川ペン先株式会社
大阪市東区落合町一丁目十一番地



ず集めた見物客と一しよに茶飯を食ってから……というのが、いかにも素人芝居の太夫らしくて、滑稽を感じる。

268 死んでくりやるなとほまちを母ハ出し

秋紅

岡崎「ほまち」は、ほまち錢の略で、ひそかに貯え置く錢(へそくり)である。どら息子が「この借金を払わなければ、生きていられない」などとおどかすものだから、甘い母親が本気にして、なけなしのへそくりを出してしまふ。

清「贊。いずれ吉原あたりで、遊びすごしたのであらう。

藤井「もったいないがだましよいい母親……の心情である。

高須「句音に疑問はない。柳雨翁は「一生の願いを母は聞きあきる」(天明)を、三面子先生は「油断して母すこたんとやらかされ」(明和)を挙げ、類句は沢山あると書いている。そうであらう。

前田「諸説に賛。もっともであるが、常識的である。

丸「贊。「死んでくりやるな」に、素朴な母親の心情が出ていて、捨てがたい句。

岡田「諸説に尽きる。

269 口をすほめてひらく物やつとかり

門柳

岡崎「不明。「すほめ」と「ひらく」の言葉の対比を狙ったものだらうが……。

清「借り物は、金屏風ではなからうか。

江戸の二大祭、山王祭と神田祭には、神輿の通る道筋の店々が、金屏風を飾る習慣があった。しかし、その金屏風は

借り物とまんざら見へる金屏風

(タル二四)

借り物で見世に後光が二日さし

(タル一五)

等とあるように、その多くは借り物であった。がやたらにそこらにあるものでないから「やつと借り」となる。ビョウブという発音は「口をすほめ」なければ言えないし、屏風は「ひらい」で使用するものだから、確信通りその対比を面白がったのであらうと思う。

藤井「口をすほめ」は、小声で内緒でと解する。借り物を、自分の物然と店頭に飾りたい虚栄心は、借りるのにも、他人に秘し、人目をしのいで、そっと頼んだのであらうし、借り手数多の時節物だけに、「やつと借り」られて、ホツとした、という句ではないか。

川端「清説賛。私は扇かと思っていた。高須「すほめ」と「ひらく」の対照の面白さを狙ったのは間違いないが、借りたのは「破れ傘」と言う、柳雨説が正しいと思う。俄雨にあってホウホウの態で、知人宅へかけこみ、やつと破れ傘を借りた——という句であらう。

前田「高須説に賛。「やつと」で、そう思う次第だが、私は、最初姦通の句かと思つた。呵々。ツイズめいたいやな句である。

丸「高須説すなわち柳雨説賛。骨が入るぞへと傘かしてやり

(後出402、23ウ)

これでも元はい、傘とかしてやり

ろくろばかりを恩らしくかしてやり

(後出443、26オ)

岡田「高須説通り傘。俄雨にあい、常平生は不義理をしている家に飛びこんだのである。「口をすほめては」、遠慮しながら頼む形容である。

270 鉄砲をひよっと崩してこまってる

鯉丈

岡崎「字義どおり、火縄銃を珍しそうに弄って、ちよっとしたはずみに故障さして困っている——という句意にしても、発想の背景が判らないので、困ってしまう。

清「鉄砲」は「河豚」の異称である。

そこで、素人が河豚を料理して、内臓をつぶしてしまつて、困っている図、と解しているが……。

藤井「崩して」は「分解」と解す。鉄砲の機構を珍しく、つい分解したもの、復元に困っている句。河豚説も面白いが、「ひよっと」の出来心から、鉄砲分解と解すべきであらう。——小生の子供の時、目覚まし時計を分解して、親父に叱られ、時計屋へ持って行った事がある。今なら「科学する心」とはめられる所だらうが、昔の親なんてものはダメだった。呵々。

川端「小生は、清説(河豚)に賛。

高須「藤井説面白し、柳雨翁は

腰元は時計元直にしかねてい

を、三面子先生は

どう工夫しても時計の輪があまり

(天明)

を、外骨氏は

知ったふり時計をくずし困ってる

(文政)

を、それぞれ同趣異型句として挙げているが、皆時計の句なのが面白い。鉄砲というものが、まだそれはど民間に行きわたっていないからであらう。

前田「ひよっと」があるから、河豚説はとれない。河豚料理は、もし家庭ですとすれば、ごく手馴れたものがするのが通例であるから、藤井説が可。

丸「藤井・高須説に賛。「ひよっと」が利いている。

岡田「ほんとうの鉄砲である。

// 川傍柳 // 初篇研究(二〇)訂正

12 頁上段2行目「秋江」ハ「秋紅」

同 三段19行目「もつと」ハ「もつて」

同 下段19行目「さすが」ハ「一つ」

同 21行目「なつて」ハ「成て」

同 13 頁上段10行目「大な意」ハ「大きな意」

同 17 行目「て言つた」ハ「て行つた」

同 22 行目「岡田」ハ「岡田」

同 26 行目「(3才)」ハ「(3オ)」

同 下段10行目「ところ面白い」ハ「ところ面白」

同 17 行目「行き」ハ「行キ」

同 14 頁二段7行目「おさらはよ」ハ「おさら

ハよ」

同 12 行目現今の「いりこ(煮干し

のこと)」「ハ現今の「いり

こ」(煮干し)のこと



これこそ男

東野 大八

「悲劇の経営者」などをはじめ幾つかの財界人をタネにして大いに稼ぎまくっている経済ジャーナリストの先達、三鬼陽之助の片腕を自任するIが過日ひよっこりと私のところへ現われ、久しぶりにチョッといばいやりながらの二人放談となった。

何さま日本の一流財界人にコッもての三鬼御大の子分だけに、興ずるにしたいがその話は八方羽根をひろげた壮大かつ活達な裏話、楽屋話の連続となった。新春早々ブライバシーの侵がいをやっちは申しわけないので、ごく罪のない一人の男をとりあげて紙上でダベることにした。

アラスカバルブ社長の笹山忠夫は結城豊太郎に見出された男で、終戦直後三井、三菱、住友、大倉の旧財閥が時のGHQの手で解体される時、彼がその日本人とし

ては最高のポストである持株整理委員会の委員長になった。旧財閥のいわば首切り浅右衛門だ。

白刃に水をかけ、白洲へ出てきた笹山へ、時の三井の代表者池田成彬が

「どうか日本人のトレードマークである『三井』の名を残しておいて下さい」と懇願した。三井、三菱は当時進駐軍の眼の仇にされていて、ただではすまない雲行きだったからだ。三浦義一の紹介で向かい合った二人の開口一番池田が頭を下げての一発がこれだった。「承知しました、私日本人です」と笹山はキッパリと言ったのけた。

こんな一幕があつてのち、どうやら三井、三菱の余命は細くはなつたが残りそうな気配となつたので、池田が笹山を招き「あなたは実に立派な人だ、英国紳士こそ貴方だ」

といった。ケンブリッジ大学出の池田の最高のお世辞がでたわけだ。ところがそのトタンに笹山が眼をむいた。

「なにいつてやがんでい、オレは日本人だ」

この伝法な大声に池田はアッけにとられたが、早速「イヤ、失礼しました、あなたはオトコです」

と訂正した。笹山は思わずニヤリとした。「オトコ」の一言が小気味よく胸にひびいたからだろう。

のちに若田内閣が誕生する際、池田は笹山を大蔵大臣に推せんしたが、笹山は三浦を通じて「オレにはまだ整理委の仕事がある。それどころじゃない」とソツケなく断つてゐる。

こんなことがあつて、整理委もやがてその任を終わって解散となつたとき、三井、三菱から「うちの重役にぜひきて下さい」と頼みにきた。しかし笹山はニベもなく

「李下に冠を正さずです」と言つてのけた。つまりこういうことを見越して、整理委で動いていたといわれればそれこそ笹山にとつては「オトコ」がすたる話となるからだ。

こうして裸になって野に出た笹山は、自分が介錯(かいしやく)したもろもろの会社のその後を見届

現代柳人録

(一) 姓名(二) 雅号(三) 別号
(四) 現住所(五) 生年月日(六) 出生地(七) 職業(八) 電話(九) 自信の句一句(二〇) 川柳以外の趣味(二一) 配偶者の有無(二二) 川柳に手を染めた年月

(290) 室井八九寸

(一) 室井巖(二) 八九寸(三) 白舜(四) 京都市北区紫野東蓮台野町二四(五) 明治22年12月9日(六) 和歌山県田辺市(七) 無職(八) 京都府一七三二(九) (一〇) 書道・相撲(一一) 有(一二) 昭和二十六年秋

(291) 藤原みてい

(一) 藤原美員(二) みてい(三) 中司務(四) 京都市左京区下鴨萩ケ垣内町一三(五) 大正9年12月27日(六) 愛知県豊橋市(七) 会社員(放送制作)(八) 京都府一四一(KK大広)(九) 交差点都会の夕陽落ちるとこ(一〇) 洋画(一一) 有(一二) 昭和二十四年十月頃

(292) 大山雅城

(一) 大山勝次(二) 雅城(三) (四) 石川県江沼郡山中町鱈峠町(五) 明治41年5月29日(六) 石川県加賀市片野町四の十(七) 建築技師(八) (九) うまいことチャンス(一〇) 神の毛をつかみ

すばらしい
着心地

蝶矢
シャツ



(一〇) 庭球・碁・将棋・麻雀(一一) 有(一二) 昭和二十三年九月

(293) 隠岐不酔

(一) 隠岐朝夫(二) 不酔(三) 晩華(四) 姫路市茶町三六(五) 明治36年4月6日(六) 兵庫県赤穂郡上郡町野桑(七) 税理士(八) 姫路二二〇七(九) 貧乏神何時まで俺を苦しめる(一〇) 書道・写真(一一) 有(一二) 昭和二十五年五月

(294) 松本吉太郎

(一) 松本吉太郎(二) 吉太郎(三) (四) 富田林市毛人谷一九九(五) 明治37年5月1日(六) 大阪府南河内郡太子町大字太子(七) 硝子細工業(八) 富田林二〇五六(九) どぶ板をふんで芸妓の里帰り(一〇) 魚つり・麻雀(一一) 有(一二) 昭和三十四年三月

けねば——と全国行脚の旅に出て
いる。

この勉強のあと、森林対策審議
会の委員長になったのが縁で、ア
ラスカ、バルブに入社したとい
う次第。名前だけは勇ましいが、こ
の会社は半官、半民的なあまりパ
ツとしない会社で、アラスカの森
資源を開発するのが仕事である。
しかし、彼は懸命にその会社と取
り組んだ。

彼の細君は花柳界の出身であ
る。東大政治科を出て日銀、安
田銀行、興銀マンのコースをと
った笹山には、ちとケタちがいの夫
人であることはいうまでもない。
しかも暇前である。

「奥さんにせす二男が適当」と親
友の一人がすすめたたちまち一
喝、以後絶交を申し渡した彼だ
が、

上役の某も、ジュン／＼とその
不心得をさとした。

「A級銀行マンは社交界が大事で
ある。ザマス夫人の集団にどう
して彼女がついていけるか、君よ
り第一、そういう世界に馴染ま
と努力する彼女の血の出るよう
な氣力を察してやれ」

と説き毛並のいい一流どころのお
嬢さん方をあげて、君の夫人とし
て世にはずかしい候補者はい
くらでもあるとまでいった。だが
彼は

「広瀬中佐はこういつています。
士官にして閣下の娘を貰う勿れ、

と。出世しても女房のおかげと私
は世間からいわれたくはありません」

困った上役の某重役は、笹山の
無二の親友三浦にその説得を依頼
した。そこで三浦は笹山と膝詰談
判した。

「論語にいわく、君子に三戒あ
り。青年の頃は血氣未だ走らず、
これを戒むるに色にあり、壮年
に入つては血氣まさに剛なればこ
れを戒むるに闘にあり。初老に
入つては血氣も衰う、それを戒し
むるに得あり、この三戒にお前
ははづることなきかどうか」

つまり若いころは女に迷いやす
く、中年となればケンカ早い、初
老をすぎると物欲にこり固る、こ
ういうお前ではないのかというわ
けである。そんな自分だと認めれ
ば芸者上がりの女を嫁にするなど
とはもつてのほか、とくるにちが
いない。そこで笹山はニッコリ笑
つて

「惚れ抜いた女をもつてこそその
三戒は守れよう。好きでもない女
を女房にしたらオレはその三戒を
ことごとく破る男になり下がりを
うだ。オレを男にする気なら芸妓
の彼女をオレの女房にしてくれる
ことだ」

三浦もこの一言に思わず笑つ
た。かくして笹山は目ざす相手を
恋女房としてしまったが、トタン
にきつさと興銀を飛び出してしま

った。

君と寝ようか五千石とろか、ま
まよ五千石君と寝よ

笹山にとつてその生涯は豪快に
オトコの氣つぷで貫いたことにな
る。現在七十近くだが、たしか快
達として、アラスカバルブでカミ
を友として、折あることにこうノロける。

「オレは妻連に恵まれている。ど
んなにわがままを通しても、女房
はマユ一つ動かさずどこまでも
もついてくる。今に橋の下でムシ
ロをかぶつても。オレの横で寝て
くれる奴だ。いいとこの娘ならこ
うもいくまい」

エリート意識に肩を凝らせて出
世するより、野っ原で雲を仰いで
大の字に寝る、空きっ腹でもその
人間の生甲斐はそれこそ太陽がい
っぱいだろう。

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番

路郎先生の喜壽・金婚の 祝賀について

——お知らせとお願い——

日本柳壇の巨匠であり、我
等の恩師である麻生路郎先生
の喜壽・金婚祝賀行事につい
ては本会が主体となって昨秋
以来慎重な企てをととのえ、
全川柳人賛同の下に一大盛
典を挙げる運びになってお
りましたところ本春に至り路
郎師から

諸君のご厚意は衷心から感謝す
るが、目下自分の健康状態では
到底そのご厚意にお応えするこ
とがむずかしいと思うからお断
りしたい。

と固辞されましたので、本会
ではその前後策につき数回役
員会を開催いたしましたして、先
生のお身体に障りのない範囲
で、同時に先生のお気持ちに
添うた我々の祝意をうけて頂
く行事として左記企画のご揮
毫についてご諒承を頂きまし
た次第でございます。

ご承知の通り先生はご高齡
のことでもあり、願わないこ
とではあります、これが最後
のご揮毫となるやを思う
時、我等川柳人として愛蔵す
べき家宝を得る、得難きチャ
ンスではないかと存じますの

麻生路郎先生の
作品頒布

作品——(一)軸・横額

(二)色紙(三)短冊

揮毫料——不要とし、お申し込
み参加者より、喜壽・金婚お祝金
を右相当額提出して頂きます。こ
の額につきましては常任委員会に
於いて各標準を定めてありますの
で、お申し込み受付と同時に詳細
な規定をお知らせいたします。

頒布期間——先生のご健康状態も
考えまして、お申し込み順に六カ
月以内とし、昭和四十年三月迄と
します。

大阪市住吉区万代
西五丁目二五

申込所 川柳不朽洞会

電話大阪六七一局六〇八一

川柳不朽洞会 常任理事

北川 春果
松江 梅里
川村 好郎
西尾 榮
代表 若本多久志



川柳太平記 (一)

富士野鞍馬

北条時政

北条氏は、平貞盛から出て、その七代の後裔が時政である。世々伊豆の北条に居たので北条を氏とした。貞盛の孫直方の女は源義家の母で、代々源氏に属していた。時政は、永曆のころ、平清盛の命で、伊東祐親と共に、流人源頼朝の監護をしていたが、直方以来の縁故もあり、特に頼朝に好意を寄せていた。

「太平記」の「時政参籠檀島事」に、
「鎌倉草創ノ始、北条四郎時政、檀島ニ参籠シテ、子孫ノ繁昌ヲ祈リケリ。三七日ニ当リケル夜、赤キ袴ニ柳裏ノ衣着タル女房ノ端嚴美麗ナルガ、忽然トシテ時政ガ前ニ来テ告テ曰ク、汝ガ前生ハ箱根法師也。六十六部ノ法華経ヲ書写シテ、六十六箇国ノ靈地ニ奉納シタリシ善根ニ依テ、再ビ此土ニ生ル事ヲ得タリ。サレバ子孫水ク日本ノ主ト成テ榮華ニ誇ルベシ。但、其挙動違所アラバ、七代ヲ不可過、

吾所言不審アラバ、国々ニ納メシ所ノ靈地ヲ見ヨト言捨テ帰給フ。其姿ヲミレバ、サシモ厳シカリツル女房、忽ニ伏、長二十丈計ノ大蛇ト成テ海中ニ入ニケリ。其跡ヲ見ルニ、大ナル鱗ヲ三ツ落セリ。時政所願成就シヌト喜デ、則彼鱗ヲ取テ、旗ノ紋ニツ押タリケル。今ノ三鱗紋是也。」

と書かれてある。それを川柳は、已にあまり時政家の紋にする時政へ与へた跡へ風がしきみ (拾四) (五八)

時政は懷中をして穴を出る (拾五) (五九)

紋所も三三九代の北条家 (拾六) (六〇)

あきらけき鱗の上る御立身 (拾七) (六一)

板元も鱗形屋の北条記 (一六六)

と、北条記にも「三ツ鱗」が詠まれている。はじめ頼朝は、伊東祐親に監護されていたが、伊東の娘と恋仲になり、子が出来たので、祐親の怒りを蒙り、追われて北条時政のところで監護されることになった。ここでもまた、時政の娘政子との恋愛となり、遂に結婚したのであった。

伊東めはやほと北条申上げ (一五二)

思ふむね有て時政ちくらせ (拾五) (六五)

時政はしらん顔がきつい好き (安七仁五)

相州の智佐殿はきつい事 (三六六)

など川柳は中々うがっている。相州は北条をさし、佐殿(すけどの)は左兵衛佐であった頼朝のことである。

爾來時政は、豪族としての財力、武力をあげて頼朝を支持し、治承四年(一一八〇)遂に石橋山の頼朝旗あげとなつた。それから頼朝は、平家を亡ぼし、鎌倉に幕府を開き、天下に身令したが、時政はずっと後見的存在であつた。狸寝入りは北条の仮屋なり (一五四)

北条の仮屋ばかりはしづかなり (九四)

頼朝が將軍になつて、富士の裾野で牧狩をしたとき、工藤祐経を討つた曾我兄弟に、時政は好意をもっていた。それは、五郎時政の鳥帽子親であつたからで、えはしおや工藤を先きへしまわ (明六鶴三) (五三)

鳥帽子親祖父のかたきもうてと (一〇四)

と詠まれ、五郎の祖父は伊東祐親で、そのかたきというのは頼朝である。

建久十年(一一九九)頼朝は死んだが、その後も時政は幕府の執権として、娘の政子は尼將軍として、權威をふるつた。それから十六年後の建保三年(一二一五)に、七十八才でなくなつた。

北条政子

北条政子は、時政の長女で義時の姉にあたり、没年から逆算すると、保元二年(一一五七)丁丑の生まれということになる。時政が監護していた、当時流人の頼朝と恋仲となり、父時政が婚約した、伊

謹賀新春

川柳初篇研究グループ

昭和四十年一月

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

- 幹事 川端柳風 (東京都渋谷区本町二ノ四六)
- 整理 高須啞三味 (芝南佐久間町一ノ五二)
- 共述 前田喜代人 (下関市入江町六ノ七)
- 岡崎重義 (福岡市野目字助内尺八五三九二)
- 清博美 (清水市入江二一九四)
- 藤井和雄 (宇都宮市西大宮町二四四九)
- 指導 丸十府 (東京都豊島区池袋六ノ一九八〇)
- 指導 岡田甫 (東京都新宿区戸塚町一ノ四四八)

詠 近 舟 同

豆の目代山本兼隆を戴つて、治承四年（一一八〇）二十四才で、頼朝と結婚した。
取替た夢は鏡も天下（八二二九）
里心始終あつたは政子なり（管四一四一三七）
いい夢を政子御前は買あてて（四〇二七）
と川柳にも詠まれ、また頼朝の頭が大きかったといわれているので、

政子御前の迷惑な膝まくら（一四二三三）
おつわりと下はちがうと政子いい（八二三二）
などと洒落た句もある。
それからすぐに頼朝は石橋山で旗あげた。その血祭りに山本兼隆は討たれた。石橋山では敗北であつたが、一か月後には、関東各地の協力者を得て、頼朝は数万の大軍を率いて鎌倉に入り、源氏再興の拠点を固めたのであつた。

その翌々年、寿永元年（一一八二）政子は、長男頼家を生み、十年後の建久三年（一一九二）頼朝が征夷大將軍になった直後に、次男実朝を生んでいる。この時頼朝は四十六才、政子は三十六才になつていた。
建久十年（一一九一）一月、頼朝がなくなつてからは、政子は尼になり、長男の頼家が將軍を繼いだ、尼將軍として政治を見たのである。

一さかり六十余州後家差配（拾五）
ほそい手で尼將軍は世をにぎり（拾五）
孫を世に尼將軍が鷹をふり（一四二二）
などと川柳に詠まれている。
頼家は無能であつたので、伊豆修善寺に幽閉されて殺された。それで十二才の次男実朝が將軍になつたが、建保七年（一一一九）右大臣になり、その拜賀式に、頼家の子公曉に刺された。
右大臣までの後家と家の中い（安五義一）
あつけない右大臣だと政子泣き（九四）
その公曉もすぐに斬られて、ここに源氏の血は絶えて北条氏の時代となつた。

東京都 富士野鞍馬
前向きという政治家にい、言葉
兵庫 兵庫 戸倉 普夫
麦なんか作つて居れぬ人不足
四等と格付供出やめて置き
イタイチエンデみんな小便するところ
大阪 橋本 緑雨
長生きをして貰うのが魅力なり
膝よせて第二の恋を女する
大洲市 米沢 曉明
男休山を仰ぎつつ
中禅寺華嚴いとこ寒いとこ
鬼怒川の夜景ともしびうつる河
ふところ手した人もいる十二月
抜き足さし足バツタを逃す足だつた
こころからあなたを知った写真帳
定石となつた渡米をする総理
箱根富士はや京都なるひかり号
外人にかこまれひかり一等車
和歌山市 秋月 宏方
新婚は薪でご飯たいした頃

菊咲いて日本人の住むお庭
交通事故続出
もう一つほしい外出用のち
今治市 月原 宵明
踏みこじる煙草よっぽど待ち呆け
菊人形裾の方から褪せて来る
株で損以來主権は妻が取り
灯をつけて寝る貪乏の癖となり
信州路の旅
唐きびを干して信州冬文度
東京へ廻る序での善光寺
須坂市 高峰 柳児
ライバルの強気へ応える薄笑い
盲判真空地帯でそり返り
前進を尻ごみさせぬボス扣え
鉛筆を尖らせ上役隙見せず
讃美歌を唄う眼知性溢れてい
京都市 布部 幸男
春三日人を殺すな排気音
花札の坊主の紅に住む明治

これより前に、父時政は出家して、執権は弟の義時が継いでいた、実朝なき後の將軍は、摂政藤原道家の三男頼經を迎えた。頼經は頼朝の遠縁に当たるといふのだが、その時二才で、名目だけの將軍で、政治、軍事の実権は、政子と義時にあつたのである。
いわゆる武家政治の基盤は、頼朝がこれを創造し、その妻政子が完成したとも見られるのである。
承久三年（一二二一）京都の院政派が、政権を京都に戻そうとしたが出来なかつた。かくして政子は、嘉祿元年（一二二五）六十九才でなくなつた。

味のコーヒ

モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻 東へ

御 門

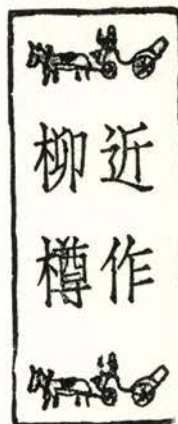
TEL 四 6 6 8 4

御集会には階上を御利用下さい

スマートで 着心地良い

GOLDEN O.S.K.の 紳士服

各地特約店に有り



麻生路郎選
北川春巢選

スイッチのくらしに生きる雉煮箸 京都市

大久保 和子郎

ポーナスが素通りをした注連飾

同

紙幣札の窓で千円おろす判

同

簡単ながら以上をもってはつと

同

けだものの一步手前に金と居る

同

づけづけと金がある言う十二月

同

ちつと手を見るひまもない十二月

同

カレンダーずしりと春の壁にする

同

栄転の椅子に冷たき瞳を感じ

同

顔役がついて謝罪の悪びれず

横田 放人

善意まで値がきめられる募金割

同

割当として寄附と集めに来

同

未決から出して未決へ入れ退庁

同

すすめてくれる人の益いつもから

同

お似合と利の多い方買わされる

同

稲刈りもすませた雨へ姑の灸

同

恐しい女だ目くされ金と云う

水谷 谷水

税務署の評価価格で売ったがり

同

ケネディ刈り尊敬している訳で

同

見下ろせばあんなきにもホテル建ち

同

未婚の娘のPRもして酌ぎまわり

同

針の穴に駱駝をとおす様な恋

同

御夫妻の摩擦もあってもてなされ

同

後添いが亭主の歳を引戻し

鈴木村諷子

山びこはたのしやまして子が呼べば

同

宣伝へ大の字三つ並べたし

同

死は哀し妻の連れ子の守りをする

同

うちの稲刈るのに人の顔を見て

同

ぜいたく世だと売り娘がそう思い

同

かんしやく場に亭主ヌウと佇ち

村上 春巳

遅刻するバスできれいな人に出い

同

男には夢にも見たと云うておき

同

どん尻で走っていても我が子なり

同

虫喰った柿真つ先に秋になり

同

謹賀新年

東京都中野区鷺宮一ノ八四

阿部佐保蘭

名古屋市区米田町一六

長谷川鮮山

電話九〇四五番

戸倉普天

兵庫県水上郡水上町小野

榎 紫 光

愛媛県周桑郡壬生川町
川新田・富士紡社宅

尼 緑 之 助

出雲市高松町

大阪通信病院

烏ヶ辻川柳会

会長 田中敏行 幹事 榎本露児

若林草右 中谷ハナ子

市場没食子 水谷竹莊

西辻竹青 木村よしを

西口竹志 重田安紀子

古谷まさる 客員 北川春巢

銭谷かをり 半田夏生

幹事 小沢史葉 堀風仙洞

森上愛論 会計 橋本幸男

青山慶之助

同

同

同

同

同

西本保夫

同

同

同

司

安藤桂仙

同

同

司

同

宮尾あいき

司

司

司

大阪市西成区玉出新町
通一丁目一
電話大阪局五五三二



吠える犬が夜の山路のつれになり

同

石川 雅城

曾祖母と祖母を片言呼び分ける

牧力市

宮川 珠笑

飛び出して社名の盾は厚かった

同

戀愛は美し性はきたならし

同

欲しかった文化勲章だと云わず

同

自由型二位理容技術競技会

同

補聴器は雑音整理してくれず

同

なるようになるお雑煮も食べられ

同

豪勢に飲んで請求書へけちり

同

奪い合った席一駅で降り

西宮市

末沢 花美

優越感くすぐられてた二日酔

宿毛市

渡辺伊津志

ええ人相してると器量にはふれず

同

海(二句)

海に生く夜の気安さ尿をする

同

やき芋をふきつつ庶民とはいいいな

同

海の幸金波が吾を追ってくる

同

老の欲シワの深まりゆくごとく

羽曳野市

戎 川太郎

七草の一つを母は添えたがり

同

こま犬の顔もうつろな神無月

同

爪切って可愛い獣がうどん食う

兵庫縣

常岡 孝風

虚飾の女白の美しさを知らず

同

長島愛生園訪う

絶景をほめて宿命語らない

同

愛犬はダーリン夫は宿六

同

真空地帯日はそんな気風雨増す

同

傘広し逢えぬ夜の雨暗い雨

同

中心になりたい末路座棺燃ゆ

同

卒中で死んだ隣と同じ年

高知縣

山川 勝子

酔う程にバーテン聞き役なだめ役

高知市

須藤 俊江

生活保護受けてハイヤーで来る受診

同

子が二人琴はお床に立てた儘

同

教養が酒に飲まれぬほどに飲み

同

死の恐怖神様なんぼでももうけ

同

無理をしたとも知らぬ振袖七五三

同

種馬で働らき蜂と養子云い

同

失業をしてから父は見栄をはり

大阪市

同

文楽へ補聴器の要る齢になり

同

親切はほんのささいなゴムバンド

同

謹賀新年

富士野鞍馬

東京都港区麻布宮下町三〇ノ二

兵庫縣多紀郡丹南町野中

磯野与志

TEL(篠山)五四一

小林孝正

新居浜市西原甲一三三九

田垣方大

會敷市水島寿町七ノ八

電話會敷四四ノ七二〇八

沢田小児科医院

沢田四郎作

大阪市西成区

玉出本通り一ノ二三

南海電気鉄道株式会社

川柳部一同

喪中に付年詞欠礼

弘津柳慶

日本専売公社広島地方局



魔法瓶父のは別に灘を入れ

同

肩書きが俺とお前の仲を裂く

同

あちら語使い娘の美容法

宮崎市

野口卯之助

進退を伺う形式だけをとり

倉敷市

水粉 千翁

金だけを頼りに女ひとり住み

同

すき焼と話をしている独り者

同

茶を飲めばそこにあります倦怠期

同

へそくりを敷いて行儀のよい枕

同

ゼスチャーで媚びる訳でもないツツク

同

社長以下紳名で通る町工場

岡山県

永宗 宗義

着ぶくれて会釈だけする満員車

松原市

守屋 万竿

ゴマ塩の頭が次々トルコ風呂

同

ストラングを混え角帽にある誇り

同

ベッドマナー解せぬ男で金を持ち

同

講義よりバイトで直かに学に触れ

同

小さな抵抗ボタンつけぬまま三日

香川県

三井 酔夢

神主が走るおはらいハイウエー

大阪市

山田 李鳥

石にこり野山を馳ける徒となりぬ

同

良い思案出ずに欠伸で明日にする

同

借金をしても新車の乗り心地

同

暗室へ高雄の紅葉持って入り

同

住みなれて都どころか職がなし

カリブスオルニア

斎藤 流路

頼りないおっさん今日は喪主として

見島市

伊丹柳瓢子

再婚の誓も同じ神だった

同

年頃を素顔母親代りする

同

優良児改札係にうたがわれ

大阪市

福富 隆子

折れるのを互に待っている無口

同

相部屋の病室名主めくが居て

同

神様もなわばりがあり七五三

神戸市

吉田 隆史

幸福の絶頂にあるノイローゼ

岡山県

阿部 良江

倒産の噂次第に社に迫り

同

ハイハイと財布をあてにつき廻り

同

宝石盗難下の三ケタで社員生き

同

ダンサーの素顔にも似て昼の月

玉島市

井上 旭峯

伝説の島でスードのタオル買い

広島県

河本 雪男

満足な寝顔故郷の青畳

同

下駄の音誰か来るなと寝間できく

同

親送る列へダンブがせきたてる

大阪市

中川 滋雀

新しい年の始めを舞い納め

若柳潮花

高槻市富田町七六七
総持寺団地三六号三〇四

まん丸い初日に長きを祈る朝

諫早市裏山風致地区
霊眼山房

川岡 霊眼子

電話一四三七番

さんばつは

何はともあれ

男前

(南柳)

男 ま え

大阪市阿倍野区
天王寺町北一ノ十八
(省線寺田町裏駅南一丁)
TEL(06) 6287



現実には涙も湧かず親が逝き

同

白墨に汚れた上衣職が知れ

羽咋市

三宅 ろ亭

ひげそりの顔よちよちの孫笑い

同

喜寿を迎えて

喜寿迎えまだ御仏の脚かじり

京都府

西村句楽坊

お迎いに待った食わせて喜寿の春

同

年寄りにされて一部屋あてがわれ

八代市

永松 道雄

芒の穂抱いた淋しい子の漫画

同

おでん屋で後任総裁一致する

八戸市

川村 映輝

停年になって官舎のよさを知り

同

三チャン農業新しい農具持てあ

兵庫県

斎藤たけお

だんな税下刈り人夫にまで取られ

同

我が脚も走行寿命がきたらしい

笠岡市

谷本鈍愚坊

帽子だけ換えた案山子と雀いう

同

ほれたとはタカがヒップの事なり

神戸市

大野木真砂

日本女性讃歌

大スター小野小町に主演せず

同

教養もなく金で世を渡り

七尾市

松高 秀峰

暇のある人しか買えぬ年賀状

同

かがしさん今日の収獲有難う

萩市

和泉 松風

温泉へ来ても麻雀眠らせず

同

心焼くレターの灰を掻きまわし

名古屋

花東千久良

挑まれてからまれて余地をもつ男

同

いい趣味と賞めて一幅たのんで来

羽曳野市

井谷みつお

昇給に鼻唄も出るトイレット

同

母性愛の猿で時間を忘れさせ

河内長野市

森本黒天子

菊満開恋も充実させて去に

同

税額で人間の値打比較され

大阪市

川口 弘村

秋刀魚焼く煙が秋を告げに来る

大阪市

田治 一登

美智子妃にバラリンビツク握手

大阪市

花田 繁子

無き姉の片見の着物裾が切れ

大阪市

松村 喜久

ツーピースシナを忘れぬのも床し

茨木市

高木繁太郎

マージャンの徹夜しに来た慰安会

金沢市

根上 杏花

闘魂のこりかたまった金メダル

神戸市

友国 多つ

しかるだけしかれば社長も只の人

島根県

星野 侑正

寒いなど云えば炭の価聞かされる

島根県

青山 釣童

米の値を知るか知らぬか学生デモ

大阪市

多田 富士

爪赤く染めた娘が稲を刈り

大阪市

谷沢 源川

雁首を取替え甘く見た政治

大阪市

木村 濁水

しんがりの席に陣取るのめぬ奴

松江市

岡崎 祥月

謹賀新年

秋月 宏方

和歌山市今福東ノ町一二八

橘本 緑雨

大阪市東住吉区平野西之町

八三

工藤 甲吉

青森市金沢一〇〇の四九

桜川 不水

下関市東大坪四町十八ノ十二

田村 緑朗

岡山県英田郡美作町湯郷五五一

愛媛県越智郡吉海町仁江

八木 摩天郎

八木 徳子

堺市九周町東二丁九

電話②七三三五番

福田 丁路

高槻市水室六九二ノ四

川 雑

玉 造 支部

一 同

方言は郷土の味

方言のはいった句を勢でもらった。
いい句は少ないとのことだが、特
殊の味が出ているので興味が深い。

編集局

名古屋弁

名古屋市 長谷川 鮮山

きしめんの大盛りちようと雪催
い 喜田 健水

「ちよう」下さいの意。
とろくさい話に酒の座がはずみ

吉原 辰寿

「とろくさい」あはらしいの意
そんなことしていかにぎやあ子
を叱り 山中 涼風

「いかにぎやあ」いけませんの意。
お手玉ここへいりやあと孫を呼

び 名波 勝

「いりやあ」いらつしいの意。
おそかったなもしいそいそ出迎

える 長谷川 鮮山

「なもし」ネーの意。

出雲方言

出雲市 尼 緑之助

「ちよんぼし」(少し)
ほでなほおじてべったりおうは

いこん

ほでな(こんで問題にならぬ)
ばおじ(夫婦)べったり(毎度)

おうはいこん(大騒ぎ)

こだでもええねへらへとおらあ
はかんじ

来ないでいいのに沢山一来やが
っておら(俺)あはかぬ(やり

切れぬ)がなあ以上拙作、出雲
弁と言えは発音が、五十音では

半分にも足りない。そこに方言
を一そう複雑化する所以があ

る。あはかんけんちよんぼしついで
こしなはえ 綾 美

あばかんけん(やり切れぬか
ら)ちよんぼし(すこし)ついで

こしなはえ(注いで下さい
な)芳子

うちの嫁さまでべったり茶わ
んめぎ ざま(粗雑)べったり(毎

度)めぎ(壊す)まだまだろ
うちき(沢山)ありますが、出

雲弁は外国並以上で、じなくそ
(でたらめ)に見られるので失

礼します。これでばくらとしま
した。(やっと落ちついた)。

北海道南部方言

函館市 北村白眼子

婆ア三平汗食ねがア暖まるでエ
新川 洋

ばヘア(婆)さんべ(三平汁)
かねがア(喰わないか)

婆アどってんぶちまけて走って
らア 同

どってんぶちまけ(吃驚仰天し
て) 同

柴コ折ってくべてケレ赤飯フケ
ネベよ 同

おだってくべてケレ(折ってく
べてくれ)おこわ(赤飯)どやばち

ピロコたれて飲むとお父ア汚
いちや 同

ピロコ(よだれ)おじア(父)
やばち(汚い) 同

嘘はりこいてどしわらしアふじ
やらむな 同

ばりこいて(許り言って)どし
わらし(子供)ふじやらむな

(ふざけるな) 同

大洲市 米沢 暁明

青曇つべかえりがして見たし
今川 景影

つべかえり(現代マッポ運動の
前転) 同

故郷を見ていつかあさいと発
ち 橋田呂久朗

つかあさい(下さい) 同

水郷のまた来なはいと灯がゆれ
る 米沢 暁明

来なはい(来なさい) 同

せんちばを遠距離電話あわてさ
し 堀内 暁風

せんちば(便所) 同

大阪市 山川 阿茶

ベンチャラを電話でまでもまく
路郎

したて 同

ベンチャラ(お世辞のこと)
ただ貰うような紋日の鰻めし

紋日(大祭日などの祝日、ここ
では書入れ日のこと) 同

男一人入って温泉はばちなり
同

ばちない(きたないこと) 同

あんたでもあきまへんのかフル
ンチョフ 同

あんた(あなた)あきまへんの
か(駄目なんですか) 同

ごりがんであろうとあいつは持
っている 同

ごりがん(ワンマンかタイラン
トに当たる) 同

うだうだ言いなはんとな取るも
のは取り 同

うだうだ言いなはんとな(冗談
おっしやいますな) 同

仙台地方の郷土句

仙台市 後藤 閑人

見るまずや今朝のたろひの太い
こと 同

見なさい。今朝の寒さでつらら
がこんなに太くたれ下がってま

すよの意。 同

おらやんだと言ってほれている
南谷子

わたしや、いやだといいなが
らも娘は惚れている。 同

に豆のおつけがうまい朝とな
り 十九楼

ことしも、えんどう豆の味噌汁
がうまい季節となった。 同

長茄子の終り初ものおあんない
文六郎

長茄子ももう終わりです。さ
あ食べませんか。 同

すっぱねをあげてさいこの母が
来る。 同

春のぬかるみの泥を裾につけな
がら、紋郷の母が久しぶりで訪
ねてきてくれた。 同

謹賀新年

あすなろ川柳会

一同

連絡先 大阪市東区平野町

二ノ一〇

(株) 藤井商店内

大鉄支部

松川 杜的

辻 白溪子

植村 客遊子

宮口 笛生

正 本 水客

吉 原 紅月

永 尾 永断

都 倉 求女

大 江 秋月

山 田 季賛

中 塚 萬石

阿 万 的

松 下 たつみ

室 井 八九寸

京都市北区紫野

東連台野町二四

久 家 代 仕 男

島根県平田市灘分町一八二二

旅の味は 銀婚から

司会 今夕は「おしどり夫婦の旅」というテーマで、ザックパランをお話しを願うことにいたしました。新婚時代はカットいたしました。お集まり願った方は、銀婚以後の方々で、世の中の酸も甘いもご存知の方に限定いたしました。ベターハーフの旅で、うれしかったこと、テレたこと、人前では話せないこと、等々、いろんなことに、触れていただきたいものです。では、多久志さんから、どうぞ。

多々志 〇おしどり夫婦の旅と申し

まして、一応人生のあらゆることに触れて一息ついた形の、つまり銀婚式がすんでから以後の夫婦の旅でない、落ちついて旅をするなどと言う気分にはなりません。それ以前だと妻と一緒に人生をふりかえって見ようなどという余裕が出て来ませんから。

主井 堂 〇そりやア、全くその通りですよ。

摩天 郎 〇われわれの若い時代には新婚旅行、所謂ハネムーンといって旅をするなどということはなかったですよ。温泉などというものは、これは病人の行くところと決まっていたものね。



写真説明 向つて右から多久志・後食子・栗
圭井堂・好郎・摩天郎・嵐風の諸氏（志子撮影）

おしどり夫婦 の旅を語る

不朽洞での爆笑の渦

座談会

栗 〇そうそう、そう言えば湯治と言葉がありましたね。どなたかの句に「女房の湯治の留守の出来事」というのがありました。女房の長い病氣保養の留守中に、女中を孕ませたというのでしょうね。一寸柳樽式の句ですね。

多 〇只今、摩天郎さんが仰言った通り、新婚旅行は一般にはしなかったものです。私自身はしませんが、それも妻の母親と三人で、座敷に床を三つ並べて寝ました。栗 〇オヤ、オヤ、それは風変わりな川の子ですね。

一 同 〇（爆笑）

摩 〇われわれの時代には新婚旅行

の留守中に姑や小姑が嫁の荷を調べたりしたものです。今だったら、人権問題ですよ。

好 郎 〇私の句に、「姑の眼もう荷飾りに不足あり」がありますが、それを言ったものです。

摩 〇今は時代が変わって別居ばかりで新婚旅行に行かない者はありませんし、披露宴を節約しても旅行は派手にするという風潮で二人が楽しむためには出来るだけ金を使おうといった割り切り方です。

栗 〇世間自体もそれが当然のように思うし、鉄道でも券号を増発したり、新婚旅行の割引きクーポンを出したりしてサービスにこれとめていきます。

多 〇航空券も新婚の旅の記念のために家へ持って帰れるようにして、美しいプリントで印刷してあります。新婚夫婦が手を組んで仲睦まじく旅へ出ることは見た目にもよいものですが、皆さん、奥さんの手を引いて歩かれた経験がありますか？ 好郎さんはどうです。私はようしません……。

好 〇そんなことは、めっそもないこと。新婚時代でさえ横に並んで歩いたことも少ない方で、たいてい後先きで、二米位の間隔を置いて、すたすた歩いたものです。

摩 〇子供が出来ると初めて、子供を中に横に一列に歩く位だなア。

大阪市交通局 柳川 謹賀新年

北川 春葉
浜田 胡蝶
富岡 淡舟
橋本 雅集
児島 与志
米島 孤舟
小田 垣牛
西岡 洛醉
藤井 力泉
草深 正則
福島 雅万
山口 雅治
室谷 惣治

河相 すすむ
西宮市川東町一〇九
電話西宮三局〇七六七

月原 宵明
今治市常盤町八丁目

山内 静水
竹原市竹原町田中

竹原川 柳会一同
代表 山内 静水
広島県竹原市

魚住 満潮
大阪市西成区玉出本道四ノ六

川雑玉造支部

城西 柳宏子
牛島 水舟
城一

友淵 貴山
大阪府泉北郡高石町
北五〇六

好い私の家内はおばあちゃんになつた今でも、旅館に入る時は「あんな先にはいりなはれ」とはにかみます。レディファーストなどもっての外ですな。

栗川私は心齋橋筋でも、妻と手をつないで歩きますよ。

多川あんたは若いなあ。

没心齋橋筋ではないが、私共でもアームインアームという風にはやってくれます。そういうことは私共ではいつも家内の方がリードをしてくれまして……。

摩二うちでは交差点だけは危いと思うのか、お互いに手をひきます。(笑)

おしどりは

罪障消滅

司川栗先生はおしどりに会という会のメンバーだそうですが、その会の模様を一つ。

栗二そうですなア、五組の夫婦で作って年に一回、三泊四日か、四泊五日で旅をします。旅館での夕食の時には床の間へ奥さんたちをすえて、下座から幹事の挨拶があり、「平素のご苦勞を感謝して」平伏するのです。

主川家庭劇の味がしますな。

主川その時の奥さん達の表情は？

栗二ただ喜んでここにこしているばかりですが……。併し、下座から

日頃の感謝をしながら、罪障消滅を思っているのですが、それは夫人連感付いてはいないでしょう。主川まるで施我鬼をしているようだから、おしどりに会を施我鬼会と改名しなくてはなりませんね。私の句に、

罪障の消滅もあり妻を連れがあります。

栗二併し、夫人同伴では旅の興味は半減ですな。

主川経済的には安くつきますね。多川「独身の頃は良かった旅の宿」という私の句はそうした時の

句に出しますね。家内を連れて行って良いと思うのは、女中にお茶を持って来させる電話をかけた

り、土産物を買う世話を万端やってくれることです。

多川そうした妻のこまごまとした世話のありがたさを句にしたのが、私の

外遊でうるさい女房の味を知ります。

主川北海道へ夫婦連れで一週間行ったことがあります、毎日毎日が蟹料理で困りました。というのは、私は物を手でつまむことが大嫌いなので、シェークリームでも箸でつまんで口にする程ですの

で、この蟹には弱りました。それを家内がせせてくれたのです。そうでなければ、蟹の身は食べられず、あしらいのホーレン草ばかりを食べなければならぬところでした。

奥さんにお願

いする

没川夫婦で泊ると大いに損をするところもあります。女中さんが料理を並べ終わると、「それでは奥さんお願いします。」の一言を残して引き下がってしまいます。酒が入ると女中さんをからかってみたい気分になるのが男ですから。

栗二私もそうなんです。何やかや冗談の言いたい性質ですのでつい

口をすべらして、後で二人になった時に、「誰も言うてはらへんのに、あんなだけが女中さんをからかうなんて、Hやわ。」とたしなめられます。イヤ、ハヤです。

多川私の場合は全然以対で、早く女中さんに引き退ってもらいたいのです。というのは、私も家内もぎゅっちよですのて体裁が悪い。私だけならまだしもですが、二人揃ってですので、意識してご馳走も美味しく食べられないのですよ。

好川夫婦揃って左ぎゅっちよとは珍しいですね。ご息に遺伝していますか。

多川メンデルの法則通り五番目が左ぎゅっちよです。夫婦子供六人のうち三人ずつ向い合って食べていると、一列は右手を、一列は左手を揃って動かしているという風になります。

好川そりやア、一寸変わってますね。まだテレ臭い話は？

没川私の家内はお喋りなので、私が学会に出ている留守の旅館で、女中さんを相手に大阪弁で喋るのがです。テレビの影響で全国に大阪弁が流行った時のことですが、私が宿へ帰ると、女中さん達が夫婦二人で大阪弁を喋れというのです。テレしてしまうて引き下がってもらいました。

大阪弁で喋ってくれと旅の宿

大坂形水

大阪市東区糸屋町一ノ二

富柳会

阿部柳太

富田林市富田林二七一

姫路市茶町三六

不酔 隠岐朝夫

電話〇二二〇七番

大坂形水

大阪市東区糸屋町一ノ二

傍島 静馬

高槻市藤の里三四

川竹 松風

高知市永国寺町一八

虹川柳倶楽部

新岡 回天子

電(唐津二七一八)

富柳会 一同

富田林市公民館内

富柳会

阿部柳太

富田林市富田林二七一

姫路市茶町三六

不酔 隠岐朝夫

電話〇二二〇七番

大坂形水

大阪市東区糸屋町一ノ二

と句にしました。

摩二思う存分喋ってチップをコチラへもらえばよかったのに。(笑)
没二これもテレくさい部に属する話ですが、別府から雲仙へ電話で部屋の予約を申込んだのです。

申込者は若い夫婦だと間違ったらしく別棟のムード満点の部屋をとっておいでくれたのですが、われわれが行くと女中さんが顔を見て全く当ての外れた言葉つきなので大いにデレたのですが、そのすばらしい部屋で一晩たんのうさせて貰いました。(笑)

渠二アベックに違ひはないが五十六というところですか。(笑)

圭二私はクーポン券の旅は嫌いです。気がむけば同所で二、三泊もしたい性質なので大抵は時間表の旅館案内の一番若い電話番号を探して行くことにしています。ところが、或る温泉でお話にならぬ程汚い部屋に通されて、それが最上と言われたのにはギョファンです。

私は座りもせずにすぐに階段を下りて出てしまいました。後に残った家内は往生して、茶代を置いてすこすこ出て来ました。全く家内残酷物語ですよ。

渠二私もその経験があります。家内は辛抱しなはれと言い、私は辛抱出来ぬといひます。茶代を出す

位なら泊りなさいと家内は言うのです。

没二私なら辛抱しますよ。気の毒のような、邪魔くさいような気がしましてね。

圭二私の句に、

一流の下等で泊るホテル通

と言うのがあります。

多二お床のべ方ですが、われわれ老夫婦にも、若いアベックと同じ様に二つの床を接近させてのべるのはいかがと思います。テレくさい思いがします。お二人さんと言言言葉自体われわれにそぐわない言葉だと思つたのです。

お二人さんご案内老妻と飯を食

いという句が私のにあります。

好二家内と同伴で有馬の「中の坊」の玄關へ車で乗りつけたら、「こんな立派な旅館は高いから止めよう」という。まあまあと二泊

したのでしたが、勘定が終わるまで宿泊代を気にしていた妻が、旅館に備え付けのパンフレット、絵葉書、マッチなど無料のものは皆貰って帰り、家で息子達に良い旅館やつた鼻高々と土産話をするのです。女心は微妙なものですな

空の旅でも

奥さん自若

司二今度は話題を少し替えて、初めて空の旅をされた奥さん達の態

度や表情をお洩らし願います。

多二一番最初家内と乗った飛行機は、四・五年前の正月でした。白

浜行ききの単発の小さいのでプロペラも元気がなくボンボンという具合で、妻も、「大丈夫ですか。」というのを、「わしと一緒なら死んでも良いやないか。」と言つて乗ったのを思い出します。

好二八瀬から叡山までのロープウェイが風で凄く揺れて大慌てしたことがあります。家内は、「お父ちゃんと一緒から死んでもええ。」と泰然自若としていました。強いものです。

渠二私達は結婚の旅の時に、最初に飛行機に乗りました。家内は案外恐がりませんでした。やっぱり親爺と一緒からという安心感からでしょう。

いたわりついたらわられつ結婚空の旅

がその時の句です。此頃は金持はゆつたりとした鈍行での旅をたのしむようです。超特急「ひかり」で東京へ行ったりする味気なさ。妻は窓の開く汽車での旅をたのしんで、蜜柑を買ったり、名物の寿司を買ったりするものです。

多二鈍行でよししみじみと旅の味という私の句があり、ご婦人は汽車に乗るとすぐにシートに座り込みます。あれでしみじみした旅の

味を味わっているのでしょう。

没二快適な旅も機翼が邪魔になりというのが北海道への飛行機の旅で詠んだ句ですが、全く海岸線のみの単調さ、横を見ると機翼と雲ばかりの旅でした。家内も飛行機は平気でしたよ。

司二多久志さんは毎年お正月にはご夫妻で旅をされますが、新年らしい旅の思い出をお聞かせ下さい。

多二私は余り飲めない方です。で、新年の来客の応待のわずらわしさを避けて、二人で三十一日から旅に出ることにしています。お雑煮は各地の旅館の雑煮をこの七八年食べております。そしてその土地での神社へ初詣をしているのです。去年は防府の天満宮、これは日本の三大天満宮、と言われていますが、気分の良いものでした。

渠二私の方では、毎年二日に子供達夫婦が集まって正月を祝いますが、食事の準備や後始末の苦勞を、老妻一人にわずらわさねばならないので、一昨年から皆の発案で、月掛貯金を始め、元日を祝った後、二泊三日で温泉へ行くことにしております。昨年は湯原温泉でした。今年は白浜です。

圭二私は正月の三日日は家で客を迎えるしきたりですので旅へは出

川 雜 淀 川 支 部 大阪市東淀川区十八条町一丁目二

西	坂	志	早	平	小	木
森	田	水	川	田	島	村
花	東	礼	清	三	孝	水
村	洋	司	生	十	夫	洞
	男			郎		

木 村 圭 利
號 水 洞

躬 和 子
夫 共 子
俾 三

大 阪 市 東 淀 川 区
十八 条 町 二 丁 目 二

大 阪 市 阿 倍 野 区 王 子 町 三 三 四
菊 沢 小 松 園
電 話 六 六 四 四 番

杉 原 愛 鳩

竹 原 市 竹 原 町 新 町

多日今迄のしきたりを改めて、正月を旅に出るなどというには相当な勇気が要りますね。

司川旅は老境に入ってから味が出ると言います。これからも皆さんいろいろなご計画があることだと思いますが……。

圭二「息子が一人前になり、「お父さん、お母さんを連れて一つ旅へ出ていらっしやい。」といつてくれたことが旅へ出る契機になりました。

好日有馬で二泊した時、夏の月を見ながらベランダでしみじみとし

た話をしたことがあります。「子供達は皆片付いたし、親の役目は果たしたし、こうして二人が泊りがけで来られることは何と倅せだろ。しかし、もう一つ欲をいうた

ら、強いる訳ではないが、子供達が小遣いや旅費をくれたなら、更に結構だが……。」と言うと家内

は、「それは勝手な欲で、あんたや私はお父さんやお母さんにそのようなことをしましたか。親のしてくれたことにまだ不足を言うて

おられたやないか。まだうちの子
供達は、あんたの還暦だと言うて

赤いリボンをつけた靴をくれて、これ履いてもっと働いて下さい、私には、母の日に着物をくれたではありませんか。

五十やと親のすべてがありが
たく

と作りなはったあんたやおまへんか。そんな欲よりも、子として亡くなった両親に孝行して喜ばせるような生活をし、子や孫を私達の親が私達に尽してくれたように尽すのが先やないでしようか。」と言いましたので私はぐうの音も出ませんでした。

葉山はかし、時代のずれと言うか、今の子供は老夫婦連れで出掛けるのを非常に喜んでいますよ。私は倅せ者で、子供達から旅費や小遣いを貰い旅へ出るのです。

圭二君の場合、還暦祝いのため子供達五人が相談して一年前から積立て貯金をして用意をしてくれていたのです。それで夫婦が北海道旅行をしたのです。

摩二私も子供達の理解があつて、
行ける時に行つておきやと言つて
くれております。それで、かつて

の旅行で妻に丸鬚を結わせて行った曾遊の地を、老境に入つて再び訪れようという計画を立てております。妻を連れて行くのは私が胃

病持ちですので、旅先で胃が痛んだ時の用心にです。夜でも薬局

を叩き起こしてくれるのは家内ですから、言わば看護婦代わりでもあるのです。

圭「そういう便利さも確かにあります。私はよく川湯温泉へ釣りに

行きさすが、妻を連れて行って餌が無くなると大阪まで買いに帰ってもらうのです。紀州の田辺からバスで、今は三時間半、以前は五時間以上かかったのです。

没日私は金を落した苦々しい思い
出があります。そんな時、妻が別

タケダ薬品

疲れ
神経痛
肩こり
心臓病
疲れ目



アリナミン®のもう！

に持っていてくれたので大助かりでしたよ。

多日子供さん達の理解深いお話、まことに結構でうらやましい限りに思います。早速家へ帰ってこの話を子供達に聞かせてやりましょ

う。

好い同感です。私も、これからも
ウンと働いて、そういう境遇にな
れたら老妻同伴で、ウンと旅を楽
しむことにしたいと思います。

言ひではこの辺で、ありがとうございました。

う・め・く・ち

クリスマス・イブの二十四日
夕方京都府下で唯一の無灯火地
区である綾部市須知山の元府営
書住宅に電灯があかあかとつい

た。暗いランプ生活に終止符打って住宅の人たちは「ワット」と歓声をあげ、このうえないクリスマスプレゼントだと大喜び。(毎日新聞)という記事があり、父が電

灯のスイッチをひねって、まはゆいばかりの電灯がつき、子どもたちが、手をたたくて喜んでいる写真が掲載されていた。これぐらい平凡な事柄で都会人から見れば、何んでもないことに違いないが、その写真を眺めて、自分の顔が自然にはこうびているのを感じた。

私たちは電灯のありがたさを、戦争の頃に、イヤというほど知らされていたが、この頃ではスツカリ

忘れてしまい、太陽や水や空気の
 ありがたさを忘れるように忘れて
 いたことを知らされたのであつ
 た。斯うした記事や写真を時々掲
 載して、こかくはる人間の心を

おさえてほしいものだと思った。

(不死鳥)

明けましておめでとうございます

大阪市南区二井戸町二三

川 婦 人 友 の 会 連 絡 事 務 所

山川阿茶

麻生 葭乃
山 川 阿茶
中 島 小石
太 田 良子
高 橋 操子
西 出 一栄
酒 田 清子
藤 村 八女
内 藤 きさ子
小 西 富士子
八 木 徳子
市 場 カネ女
吉 川 悦子
安 本 美喜
置 田 ふじ
藤 岡 花梢
上 田 美弥子
小 林 トメ子
林 春 栄
西 村 梨里
宮 尾 あいき
岩 田 美代
森 川 すみれ
鳥 取 周甫
天 正 みさ子
三 井 酔夢
児 玉 しげ子
坂 川 有子
船 津 千夏

人生漫

河野春三選

応分という十円の赤い羽根

兵庫県 常岡孝風

革命の旗手はほくなり鴉目をむく
思慕まるく消えそう短かき命なり

卓に寒い風あり薄給悟るうつろ

フィルターに偽善がうつるこそばゆし

尼崎市 林茂子

砂丘の太陽 全身へ塗布

頭、頭、頭だけの群像

灯台へ佇ち 空間へ馳られる

雲を双手で掴みたい衝撃

大阪市 森川すみれ

夜の闇に眼みひらき罪思う

ピツタリと扉を閉めて鍵を拾つ

勝利者となりしに何をこの空虚

プザー鳴る 心のドラマ終る時

大阪市 今西章雅

金メダルこの国もこの国も地球儀を廻す

坂道を石コロコロ血達磨にもならず

スラムに教会があり 酔どれが寝ている

自画像が鉢の金魚となっていた

今治市 月原宵明

小石でも怒れば火花発すなり

大阪府 早川清生

何個かのメダルと劣等感を得る

「夫婦善哉」次々 みことな愛不毛

声の大きさと教との民主主義

基地と貧しさとの島へ生まれつく

女流作家すべて喪うとき受賞

少年院の遠い記憶に教師師

東京華麗雀の色に安堵する

香川県 三井酔夢

糸をはく蜘蛛よ私は火を吐かむ

海底に目をあく貝の罪深し

止ってはならぬわたしの愛の独楽

離しても不信心犬はつきまとい

犬だけが支配下にある自己嫌悪

白バラをつむ神様が慇しい朝

京都市 大久保和二郎

人生の死角に夢をあたたためる

天衣無縫 だが纏うもの 纏うて居

居酒屋の隅で政治をこきおろす

地べた這うて大根間引いていて貧農

ジーンと来るものあり影法師を見つめ

仙台市 牧野部日東里

青春を謳歌 再び還らねば

流星一つネオンの海に吸い込まる

寒風の糸一条 みの虫耐える

墓石なお 永劫の自虐を刻む

不死鳥のごとき嫉妬よ業ごうという

流離の道 自失の歩調つづく

羽曳野市 戎川太郎

人形のさだめへ生きる顔つくる

平凡の中の自分が肩を張る

夜の虚飾ネオンに神を近づけず

ある時の僕に男と言ってやる

刃を合すことばに愛の芽が育ち



心の隙間からもう冬が怒っていた

黒部ダム自然の怒り溜めた色

人間の細工笑う 雪の嶺

名古屋市長 花束千久良

幾星霜維新の街の一つの碑

無駄捨てきれず冬に突きあたる

構図の上にあぐらをかいている女

和解のあたま消し飛んだ朝だ

今治市長 長野文庫

スポーツの底で文学か細い灯

波風に縁なし海の底の砂

十月下旬心の底に穴が開き

岡山市 牛房 謙士

障子紙貼って白紙に戻る気か

亡命の烙印もため故郷あり

猫の爪なんぼ研いでも猫の杓

西宮市 樋口 舟遊

路傍の石吹雪の愛撫にも馴れる

河の性 女のごとく大地富み

一人来た眼に一對の滝がある

倉敷市 水粉 千翁

日の落ちたところに金魚営める

人妻が主役不幸な男たち

倉吉市 奥谷 弘朗

双肩の口ほどにない肩の中

三度目の正直が居てほえまし

島根県 青山 釣童

沈黙の海の長さへ生きるのみ

汐騒が心にしみる夜光虫

宿毛市 渡辺 伊津志

秋霖の蝶よあの山蔭へ行け

妻よ見よ秋逆光の白雲を

熊本県 有働 芳仙

風雪に耐える日年輪歪み

十字架に住む魂の夜傾斜

京都市 室井 八九寸

ご機嫌が菊を無視する文化の日

切り抜く裏の広告に安堵する

玉島市 井上 旭峰

落書の直線愛に飢えている

毒舌を真似たオームの目が憎い

神戸市 吉田 隆史

宝石を覗く頭上の特価札

はりかえて障子に心新たなり

松江市 柳 楽鶴丸

共稼ぎ三年妻の座をきずく

芦屋市 唐崎 専翁

参詣の御利益何とロマ書五章

金沢市 根上 杏花

木枯へ柿しっかりとしがみつ

岡山市 永宗 宗義

口止めて話せばそのまま広がりぬ

七尾市 松高 秀峰

母老いてメモした紙を探して居

羽咋市 三宅 ろ亭

結論を明日にのばして時稼ぐ

「川俣柳初篇研究」の

バックナンバーご希望の方へ

本誌昭和三十八年四月号から連載されて
いる「川俣柳初篇研究」のバックナ
ンバーの二十一回分（昭和三十九年十
二月号まで）を一まとめにてお読
み願えることになりました（残部少数
ですから売切れたらおゆるし下さい）
至急ご注文願います。

誌代二五二〇円

（書留小包送料別）

川柳雑誌社サービス部



講座 入門

研究題 「留守」

清水 白 柳

新年ともなりますと留守にする
ことが多いので色々の話題がある
と思うが

たよりない留守番をこいらに居
らず
というようなことになりがちで
あろう。

留守番のラヂオへ今日は今日は

宗 義

ラヂオをかけたばなしで寝てい
るのかも知れない。出掛ける方は
留守番へ用事山程言うて出る

幸 雄

のであるが、言われた方では頓
着していない。そこらの本をひっ
くり返すのだが

留守番の読む本頭に入ってず

与 志

である。店を持っている商人は
四五日の留守で信用案じられ

みさ子

でおおち旅行にも出かけられ
ないようである。忙しいのは商人
だけではなく、農家の人たちも同
じである。

農繁期風邪を残してみんな留守

勝 子

ということになるのである。都会
では

留守ですと泡の手とめて隣りか
ら

章 雅

声をかけてくれる程であるが、
中には

おせっかい留守の裏口までおし
え

滋 雀

てくれるのである。旅行に行
きたいのだが。

猫が居て一泊旅行にまだ迷い

弘 朗

留守すればしたで気になる家の
中

松 風

というような純情なのもある。
留守ですと保険あつさり断られ

万 竿

セールスマンもまたつらきかな
である。

苦手への訪問留守でホッともし

弘 村

やれやれと思って帰るのであろ
うが、

行きにくい集金留守にして帰る

宗 義

という手もあるのである。

ないのは

玄関の南京錠は留守を告げ

松 風

で心得ねばならないことである。

千 夏

隣りより空巣の方が留守を知り

というわけでこっそりやられては
ならない。

神様にあれ程留守を頼んだに

八 郎

といってみても後の祭りである。

また神様が留守になる時もある。

それは十一月で日本中の神様が
雲へ集まられるというのである。

稻荷さん神無月でも繁昌し

句 楽坊

神様の留守は目に見えないからみ
なお詣りするものであろう。かなわ
ぬ時の神頼みである。

訪ねたら留守駅までの遠いこと

弘 村

こんな時には
留守にきた人の用事を戸が咥え

和三郎

珍客が逢えずに残す名刺裏

隆 史

ということになるのである。また
気の利いた

来客へ留守の貼紙はって出る

讀 士

のもあるが、よっぽどしっかり錠
をかけておかないと危い。紙が貼
ってあつても

錠穴をやっぱり留守かと覗いて

万 竿

鍵穴をのぞいて留守をたしかめ
る

秀 夫

という物騒なことになるのであ
る。

勝手知る留守へ上った待ち呆け

滋 雀

いつわりでなく留守だった待ち
呆け

光 道

こんなことになるのだつたら待っ
ているんじゃないかと思ふ人も

あれば、また奥ゆかしくも、

待ち侘びて帰ったか花活けてあ
り

弘 村

というはのほとしたのもあるの
である。

社長留守社員こっそりバイ開み

みさ子

社長が居てはバイも持てないので
あろう

大の字にねてるすごいの抄らす

鬼の留守サテやることもないお父
さん

千 良

手持ち無沙汰のことではある。
コドモルス逆さに貼って祖母健

在

かかる世に久松留守の貼紙が

八 郎

おまじないはいつまでもすたらな
いものと見える。そこに人間の弱

さがあるのだらう。

おるす番長女は母の座をしめる

醉 夢

妹に叱られている母の留守

万 竿

女の児というものは生れつき母性
愛を持っているのであろうか。そ

うかと思ふと

母の留守子等はちらかすだけち

かけ

杏 花

ということにもなるのである。そ
こで

子の留守におもちゃ掃除も兼ね

ニッサン セドリック・ダットサンプルバード

兵庫県下特約販売店 運輸省指定重整備工場

尼崎日産自動車株式会社

専務取締役 若 本 真 彦

尼崎市尾浜下ノ川四三四 電話大阪(06)局 5861(代表)

なし 釣童
大かた幼稚園にでも行っているの
だろう。
カタカナとひらかなで母の留守
だのみ 初甫
どちらも少しい姉弟なのであろう
か。母も氣を使っているのでは
ある。そうかと思うと
鍵っ子は日曜までも留守にされ
というのもあり。馴れたのにな
ると、
集金が来る日でカギツ子留守に
する 秀夫
デキバキと鍵っ子留守に馴れた
口 章雅
というようになるのである。無邪
気なのは
たこ焼に鍵っ子留守を忘れてる
というのもある。 雄声
又留守で舌打をする集金人 章雅
鍵をかけて中に居るのかも知れな
いが
掛取りのカンは居留守を出て来
させ 幸雄
帰る迄待つと居留守を困らす氣
と仲仲の強いものもある。 勝子
さつきまで居たというのが嘘上
手 吉三郎
酒さげて行ったに留守とうまい
嘘 句楽坊
こんな嘘は素直にきいておいたほ
うが賢い。
秀才の留守グループのにぎやか
さ 真砂
人間やはりドングリの背くらべの
方がよいらしい。

金泥集

選乃蔑生麻

死ぬ日まで禁酒の出来ぬ夫と知り 醉夢
あきらめて実のらぬ恋をきりかえる
事故現場通ればあきらめ又うすき 同
転々と医者かえ不妊あきらめず 同
夫にも妻にもあきらめ出来て無事 同
あきらめた妻は浮気をり上げず 同
あきらめることを鏡に強いられる 清子
あきらめて耐え抜く母の明治調 同
正直な人もいましたこの財布 同
あきらめて涙を拭けば窓も晴れ 同
あきらめたレスシヨウインドにまだ残り 阿茶

「あきらめ」
惜しまれた画才あきらめ嫁の口 同
進学をあきらめた子へ親が泣き 同
あきらめるように話をもつてゆき 同
捨て犬ついにとは雨を歩き出し 同
灯がついてもまだあきらめ探しの 同
あきらめる涙を拭いて座りかえ 一栄
意地張つてれどあきらめられぬ日がつづき 同
あきらめているのによりを戻しに来 同
あきらめた日から苦難に光りさし 同
あきらめてしまった株値上り出し 同
もう一度ねばつて見よと智恵をつけ 同
初恋があきらめ切れずまだ嫁かず 勝子
骨と皮あきらめ切った顔で死に 同

中身よりあきらめ切れぬ皮財布 同
あきらめてあきらめ切れぬ子を死なし 同
無き縁とあきらめくれと母は泣き 同
あきらめの涙を海に捨てに来る 同
あきらめがついて心が軽くなり 同
あきらめがつけば空腹身にゆえ 同
あきらめたつもの恋があきらめず 同
割り切ったつもの娘があきらめ 同
泣かないでねどどうかなるわと娘がため 同
あきらめたような顔して恋に泣き 同
結局は違ふ世界に住むあなた 同
あつさりとはあきらめなさいとは第三者 同
次回題「すき焼」〆切一月末日 同

脈搏が留守やとナースびびらせ
る みつを
入院生活も長くなると看護婦さん
も冗談を言うようになるのである
留守のビル護る靴音忍ばせて
長始
合成の靴底を穿いているのかも知
れない。
靖国の母は留守居の気のまんま
弘村
もう二十年以上にもなるのだが、
あの時のが忘れられないので
ある。いまにも只今と帰ってくる
ように思っている母の気持ちは言
い知れぬものがあるのである。さ
て
一家総出鍵かける間だけ妻おく
与志
みんな自動車にのって待つてい
るのである。勿論運転はババだろ
うと思うのだが楽しいことである。
それが妻の留守となるとわびしい
限りである。
洗濯器欠伸している妻の留守
みつを
茶簞笥へ欠伸がとどく妻の留守
釣童
集金へアルミ貨も出す妻の留守
保夫
玄関へいつものメモで妻の留守
弘朗
今降って来そうな空へ妻は留守
秀夫
好きでんね妻PTAへ今日も留
守 滋雀
商戦に勝った帰宅を夫人留守
真砂
妻の留守手当り次第食べ荒し
勝子
飲み仲間水屋を覗く妻の留守
隆史
有るところに有るものがない妻の
留守 和三郎
お先棒かつぐ相談妻の留守
与志
となるのである。
留守勝ちの言訳めいてくる話題
白柳
以上
次回研究題「派手」五句以内
〆切 一月三十日
宛先 大阪府南河内郡美原町
丹上四〇四
清水白柳



コクヨ
便箋

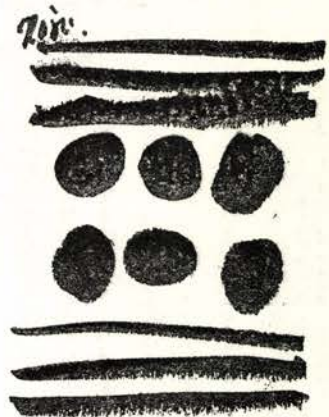
集路一

大胆

弘津柳慶選

慶風子
柳薫溪
津高白
弘橋辻

跳馬大胆山下跳びに又新手章雅
大胆な営業ついに戸が閉り木魚
キッスしてから大胆なポーズ見せ
大胆に買った株でくよくよし雄々
籠抜けをサツを舞台にしてやられ
大胆に鏡へ女肌を見せ杏花
泥酔の大胆道路にまだ眠り光郡
大胆に女が脱いだスリガラス和三郎
大胆に燃やして手品鳩を出し芳仙
大胆な凝視男眼を伏せるどんたく
大胆なノスに身内は目をそらし代士男
大胆な女房が株で穴をあけ藤波
大胆になれぬ夫で歯がゆがりたけお
大胆な子が頼母しく案じられ良鳩
大胆に明治生れを驚かせ良江
大胆に言葉をかけて後が出ず同
大胆に行けと初恋励まされ雄声
大胆なA少年のトップ記事弘朗
大胆な筆は半紙をハミ出して八九寸



大胆にくどき落した酒の酔勝子
大胆な女可愛盛りの子を殺し同
大胆な雷族の鉄かぶと李鳥
大胆な演技を見せる軽わざ師松風
大胆を見込め養子に來た男秀峰
派出所で盗み隣りの質に入れ隆
大胆は無死満望へストリート七面山
大胆さを買われピンチに起用され素身郎
大胆なポーズへ男目をそむけ千翁
子の為の主張へ女の大膽さ十九平
大胆な情痴へ炊ける電気ガマ讓士
大胆のあげくのはてが松葉杖恵二朗
大胆な筆勢墨の香がにおい旭峯
大胆さ師匠ゆずりの晴れ舞台千久良
事故現場医者大胆なナース連れ宗義

五人客

大胆な犯罪自演の中に居る保夫
大胆な質疑に司会慌てさせ代士男
大胆にしてほしいのに手も触れず素身郎
大胆な手口刑事をふりまわし宗太郎
どたん場に来て大胆になる女旭峯

大胆に麻薬新聞紙でくるみ淀月

家具

橘高薫風選

地
天
搜索二課女の大膽さにあきれ十九平
大胆に火中へ飛び込む母性愛みつお

ゼイタクな家具をそろえて倦怠期失名
工料出の兄が洋家具の店を出し失名
大安を入れた家具屋のカレンダー芳朗
五点セットデパートを巡りまだ買わず隆史
本陣に昔を語る家具があり句楽坊
家具展で我が家の家具のみずほらし古心
家具らしき家具はなければ我家なり木魚
養老院めいめい家具をすこ持ち同
新世帯家具を選ってる楽しそう秀峰
鏡台もタンスも母のもので嫁く千久良
家具一つない新婚にあるフアイト鶴丸
春秋に耐えた家具にもある重み讓士
再婚へ別誂の桐ダンス十九平
本箱の大きさに似ず本の数七面山
宿替えへちと恥かしい家具もあり初甫
一豊の妻とは別な家具のすみ春己
褒められた家具でれくさく月賦なの光郎
あれこれと家具調うてせまい部屋釣童
前住の家具アパートにあり過ぎる八九寸
文化生活月賦の家具の中に座し晃男
三転をして茶ダンスは元の位置伊津志
メラニンのボリのと家具も化粧する万竿
ご先祖のタンス家柄誇つてる映輝
台所改造元の水屋据え愛鳩
もらい手もない旧式の冷蔵庫藤波
家具売場出て現実にもどる恋宗太郎

柳志寸言

本多柳志



◇電子式絶対選句機が出来た。句箋を入れると天地人佳作の口から選をされた句箋が、自動的に出て来る仕掛である。ためしに入れて見た。全部が全部没の口からバサッとして来たのには参った。一川柳作家の夢でした。

×

◇「詞の正確さ」とは感性や智性のはたらきと、其の表現との誤差を最小になし得ると言う事である。日本語が不正確だと言うのは、それを使う人の頭の方が不



古はけた家具捨てきれず住む木家
指紋だけつけて家具屋をみてかえり
抽斗をぬいて家具屋は品をほめ
家具も又疲れ結婚二十年
三越が叱られていた家具セット
家具の値にあてはめて見る二日酔
三年に一回使う家具も買う
送り賃だけを家具から引いてくれ
家具までが停年という色になり
家具優先新婚小さくなって住む
その中に人間を置く家具調度
その中に使わぬ家具の見栄があり
カチカチと鳴るかんがない今の家具
新調の家具ビカビカで中うつろ
成金の家具は新旧雑居して
新しいセンスの家具と嫁が来る
簞笥一つないのにテレビと据え
家具からの感じくらしが説めるなり
家具売場豪華な夢を描いてみる
家具売場肩を並べて夢があり
家具売場売約済みも見せて売り
三度目の喧嘩でやっと家具一つ
家具売場之と思えば赤い札
家具商と値引き簞笥の向いから
トックで運ばば派手に見える家具

淀月 芳仙 すみれ 滋雀 旭峯 涼人 秋月 同 同 隆子 千翁 同 章雅 与志 松風 李鳥 勝子 雄声 恵二朗 良江 可住 野迷路 同 代仕男 雄々

和三角 伊津志 李鳥 信二 雄々

人が 信二

がらくたの家具が部屋代半ば食い

拾い屋

辻 白溪子 選

地 一棹は親が決めてる 桐簞笥 淀月
天 家具のない暮し東京で見て帰る 不二
軸 子供が増え家具増え人生上り坂

拾い屋になっても夢は持ち続け 旭峯
拾い屋の夫婦小金貯めており 秀峰
入学の子に拾い屋やめさされ 杏花
拾い屋の肩に落葉がひっかかり 可住
犯人を見たとき拾い屋出頭し 七面山
拾い屋へ一票の目をとどめおき 謙士
拾い屋が持ちやうすいようにと紐もかけ 弘村
拾い屋にもやっぱ縄張りある喧嘩 鶴丸
芸のないこと拾い屋を真似て飲み 伊津志
拾い屋の眼に勿体ないものばかり 雄声
大阪で拾い屋けっこう食ってゆけ 弘朗
拾い屋の意欲ネオンの灯で拾い 千翁
拾い屋の子供夜学を首席で出 素身郎
拾い屋の胸に拾った赤い羽根 古心
緑あつて拾い屋同志が結婚し 七面山

拾い屋を励ます妻の手内職 千翁
拾い屋にさしてひびかぬ物価高 淀月
拾い屋で食えるから人生面白し 明朗
ダイヤでも拾うた気持ちで屠蘇に耐 句楽坊
拾い屋の過去持ち人情味にあふれ 宗義
登り道亭主挽き手の肩車 八九寸
拾い屋の過去あるらしい英会話 滋雀

拾い屋もしたとは自叙伝書いていず 恵二朗
荒縄で帯しめ拾い屋かいがいし みつお
拾い屋の犬はまともな人に吠え 与の助
拾い屋が盗んで行ったことにされ 雅城
籠のものを濡せず拾い屋雨やどり 章雅
拾い屋も結構楽しい 釜ヶ崎 みつお
拾い屋を頼りに小犬ついでゆく 木魚
拾い屋が他殺死体へどきっとし 雄々
顔よこれているから拾い屋と似合い 章雅
小春日へ拾い屋楽しそうに選り どんたく
野良犬がなつく拾い屋齢になり 古心
四階の窓から拾い屋を見る寒さ 初甫
精薄見つれて拾い屋仕事に出 愛鳩
拾い屋の濁酒が入った政治論 滋雀
拾い屋の眼にぜいたく程が過ぎ 凉人
拾い屋は猫奮をつくって拾いあげ 千久良
ダンボール拾い屋思わぬ儲けをし 勝子
ゴミ箱へ拾い屋が来る犬が来る 初甫

五客

拾い屋でけっこう食える都会の灯 雄々
髻さんで通る拾い屋の政治論 八九寸
拾い屋のハカリに嘘も世辞もなし 旭峯
拾い屋の夫婦民社へ票を入れ 十九平
拾い屋のインテリらしい社説読み 淀月

人

拾い屋が手袋片方落して来 春己
拾い屋は朝の暗さを背負うて来 李鳥

天

拾い屋が生保を受けて金を蓄め 勝子

軸

市有地へ拾い屋無許可の家を建て

正確ではないのか。

◇一番面白いのは真実を書く事だ。と言った偉い人があちらの国に居る。川柳が一番面白い訳だ。

◇オリンピック東京大会開会式を、感激と涙の中で迎えた。たかが運動会である。一兆円と言う金は何と大きな犠牲であろう。併し戦争のあとには憎悪が残る。オリンピックのあとには平和と親愛が残る。何と安い犠牲ではないか。

◇自分で唄えなくとも、歌手の上手下手は分る。自分で作れなくとも、川柳の良し悪しは分る筈である。川柳作家ではない第三者の批評が一番恐い。

版 写 映 版

凸版

切で早

四葉部
台木部
一書作業

東洋写真製版所

有限会社

大阪市阿倍野区南町中2の6 電話 (621) 0587・0568



本社忘年句会で優勝し不刊詞子を獲得した
福高氣風氏(すずむ氏撮影)

柳界展望

句会

▼本社新春句会は七日(木)午後六時から千日前電停東入ル自安寺で開催する。恒例の短冊交換会もある。柳友お誘い合わせの上で数出席せられ新春気分を盛り上げて戴くようお願いする。▼七面短詩型文学クラブ川柳部句会(和歌山市)は十二月二日(水)和歌山市北新地の朝千鳥で開催。▼大阪通信病院川柳会忘年句会は九日(水)午後六時から電電公社のなにわ寮で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)忘年句会は十七日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)忘年句会は十八日(金)午後六時からコクヨ第二クラブで開催。▼川維岡山県各支部連合忘年句会は十二月十二日岡鉄クラブで開催。▼川維備前支部(岡山県)忘年句会は十二月十三日浄美居で開催。▼竹原

川柳会(竹原市)忘年句会は十二月六日山内静水居で開催。▼川維下関支部一杯水川柳会忘年句会は十二月二日下関市日和山職員会館で開催。▼富柳会(富田林市)は十二月十三日午後一時から弘業で十二月例会を開催。▼第八回名古屋市西区民川柳大会は昭和三十九年十一月二十九日富士銀行三階で開催。

消息

関紙に路郎門の元堺市会議長故居谷一柳氏の川柳句抄を執筆された。▼戸倉普天氏(兵庫県)は約八カ年を費して編纂の「沼貫村誌」を稿了、最近に月に二度程愛孫の顔を見に上阪されている。▼牟田一哲医博(大阪市)は昭和三十九年十一月一日、開業医優秀研究者として日本医師会から最高優功賞を授与された。十一月六日には受賞記念学術講演会が推薦母体の南区医師会主催で盛大に開かれ感謝しておられる。「半世紀凡医を続け今日の栄え」▼高須昭三味氏(東京都)から、私はこの頃の寒さでペンを持つ右手が痺れて困るが路郎先生ご健健でと。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は去る十一月二十一日商用の帰りに一寸した交通事故で右の人差し指を負傷、四本指で手紙など書かねばならず一寸不自由しておられる由。▼石井賢平氏(豊中市)は一昨年末以来約一年大阪へも出す各地句会にもご無沙汰をしており、最近では困難より難波の状態へと進んでおります。▼末だ息はしてると例の筆達者。▼小西雄々氏(米子市)は旧年十一月二十八・九日の両日全国鉄川柳人連盟の幹事会に出席のため来阪された。▼須藤俊江さんの(高知市)から、「上阪のあなたの記念写真をありがたう存じました。信州行きの疲れが出て約一カ月寝てしまいましたのでお礼が遅れました。路郎先生のお身体のご不自由が、こう寒くなつてくると案じられます。」と。▼渡辺曉童氏(愛媛県)は昭和三十九年十月一日吉海町役場教育委員会教育長に再再任された。▼坂田東洋男氏(尼崎市)は昭和三十九年十一月二十五日附をもって伊丹郵便局庶務会計課長に栄転された。▼小西無鬼氏(兵庫県)は身辺の雑務と公務に追われ句稿が遅れがちだが新年から心機一転の気持ちで頑張りますと。▼後藤梅志氏(大阪市)から、「先生、おからだの方も勝れないのに雑話の方は着々良くなり、これは他の人には出来ないことと深く敬服しています。何かとお心に任せない事が多いでしようが、出来ることは精々お役に立ちます。兎に角、遠視、ご人徳を益々徹底されるよう祈ります。私は七十才になつても正月がくるのがとても嬉しく、正月にはゆっくりお伺いするつもりです。」と路郎先生へ来信。▼山田季賢氏(高槻市)は国鉄新幹線残工事打合会のため有馬へ。温泉での一泊を楽しまれた。「川の音にうつ有馬の朝が明け」▼佐野ト占氏(八代市)は旧臘七日沖繩へ。政府主席を訪問、那覇市内部見学、真夏のような暑さの中を中部北部、そして南部の激戦地戦跡を巡られた。▼永松道雄氏(八代市)から、「路郎先生が田中辰二先生を見舞われましたこと後日ト占氏から聞き熊本の柳人残念がった事でしました。私も七十一才になり今後川柳を支えるに生きることになります。が、社会学の勉強にはこの上なく「川維」を読んでいると世の中が

謹賀新春

川柳雑誌社鳥取支部

大西 八歩
河村 日満
杉谷 湖山
森田 茗人
森本法泉子
福田多可志
岡島 芳道
北村 三步

高 峰 柳 児
長野県須坂市太子町

唐 崎 専 翁
青屋市翠ヶ丘一六七
電青屋②六二八二番

内 藤 き さ 子
岸和田市上町三六

電話岸和田貝塚②八〇七九

横 山 一 声
岡山県和気郡吉永町

吉永 一 四〇〇

島根県大原郡木次町

藤 井 明 朗
むらくも川柳会

不朽洞の人々



大阪府立薬学高校事務長の田田貞次氏

三十三才で急性肺炎を患ったが、奇蹟的に助かり現在に至るまで無病息災、休日は勿論出勤日も晩から畑に飛び出して、椿栽培に熱を上げています。椿は上代から千年近くの間、日本人に愛されて来た日本が故郷の花木である。今日では数百年種の多きに達し、十一月から五月に及んで楽しまして呉れる。今や椿は欧米に於いても、花木の中のノール、ファミリー（貴族）と称えられている良き花である。自分の手許には百余種類あるが、今後ともその数をふやして、椿の花に埋もれ永遠の睡りに就くことを念願としている。

無病息災金のないのが苦にならず

（丁路）

明るく思えて愉快です。」▼森本法泉子氏（鳥取市）の夫人は長らく京都加茂川病院に入院加療されていたが、旧年十一月十二日鳥取市の県立中央病院へ転院されることになった。氏は今後、鳥取句会に出席出来る楽しみが戻って嬉しく早速に忘年句会から出席される。▼羽佐間柳葉氏（ホノルル市）から美しいクリスマス・カードが届き、路郎主幹ご夫妻の健康と「川雉」を通じての海外にいる柳人の川柳指導を願われた。▼橋高薫風（大阪市）は薫風子としての最後の本社句会で路郎賞を獲得、不朽洞杯を授与されたので、有終の美を飾れたと大いに喜んでいる

句集・柳書

拘らず佳句が多いのは作者の深い人生経験のためものか。活字が美しい。「里帰りかたが下手になっている」B6版七十五頁、定価二百五十円。▼句集「毎日川柳」が昭和三十九年十二月広島市庚午南町二丁目九ノ二広島川柳会から発行された。毎日新聞広島地方版の日曜川柳、最近一年間の句から更に約五百句を選び「作品集」とし、石原伯峯・森脇幽香里・三上十進・岡田俗菩薩・石井政男のベテラン五氏の自選を「五人集」とした二本の柱から成っている。B6版百三十一頁。▼「ふあうすと」十二月号は四百号特集として昭和三十九年十二月一日神戸市長田区五位池町一丁目一〇ふあうすと川柳社から発行された。▼句集「川雉」（川柳吟吟集）五十号が昭和三十九年十月十六日京都市上京区相国寺北門前町上の町六七〇川雉京都支部から田中鳥雀編纂で発行された。昭和三十八年四月から翌

三十九年九月までの川雉京都支部句会吟の集大成である。

清 酒



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

慶弔

▼酒田清子さん（大阪市）の長女章子さんは、十月二十日東邦ホテルで紅屋産業（株）勤務の谷悟氏と華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げる。

▼小沢史葉氏（西宮市）母堂マキさんは十一月十八日心臓麻痺で急逝された。年六十一。謹悼。

転居

▼小沢史葉氏（西宮市）は西宮市愛宕山五六へ転居された。▼植村客遊子氏（神戸市）は神戸市須磨区松風町二丁目国鉄アパートの一の二へ転居された。▼岡崎重義氏（福岡市）は福岡市野多目字卯内尺八五九ノ三二へ転居された。

社屋移転

▼大阪形水氏（大阪市）代表取締役の株式会社オイエスケーは新社屋が完成十二月八日左記へ移転になった。大阪市東区南新町一丁目十三電話東側局八〇一五（代表）

不朽洞会から

☆新会員紹介 十二月 正

▼宮川珠笑（枚方市） 白柳氏推薦

▼後藤梅志氏は一月から特別会員に種別変更

支 部 京 都 社 誌 柳 川

京都支部
井ノ下晴芽
大鶴喜由

大久保和三郎

田中鳥雀
竹松九角

小林亀一

平井絵丘

平岩司郎

本儀親生

岸和田市野田町一七五
高橋操子
電話岸和田貝塚②六六三二

山田季賛
山田スミ子

大阪府高槻市西五百住三
五ノ四七幹線アパートB
一〇二

第百六十六回

大萬川柳

兼題「荷かざり」

入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 三百八十四句
 入選 五十一句

島根 釣 童
 荷かざりの端へ笑顔で写される

慶之助
 君だけでいいんだ荷かざりなどいらん

東京 泰 造
 荷かざりへ母親の見栄へ娘の虚栄

大阪 翠 女
 荷かざりに月賦月賦のものばかり

大阪 十六里
 荷かざり省略持参金で来た団地

門真 鉄 児
 この部屋の最後を飾る荷をならべ

富田 美 房
 荷かざりの苦勞母親ばかりはめ

富田 東雲楼
 荷かざりに姉のおさがり二三枚

京都 八九寸
 荷かざりへ大旦那だけ明治調

笠岡 忠 三
 荷かざりをまだ仲人が点検し

岡山 十九平
 荷かざりへ親子のセンス食い違い

大坂 保 夫
 荷かざりへまだ迷信が生きていた

羽曳野 静 波
 アパートへ嫁く荷かざりと思われず

米子 雄 々
 倒産の一步手前の荷かざりす

大坂 良 郎
 荷かざりのイミテーションも見抜いてき

大坂 恵二朗
 荷かざりへ牛売ったとは娘も知らず

見島 可 住
 荷かざりもなく後添いの荷が届き

藤山 可 住
 荷かざりの足しにもならん満期来る

羽曳野 圭 太
 荷かざりへごっそり退職金が減り

大坂 文 秋
 荷かざりへ2DKが悲鳴あげ

大坂 雅 雅
 ぞっとするなあと荷かざりがめめられ

大坂 章 雅
 値踏みする声を荷かざり聞いていた

大坂 あいき
 荷かざりのエバーソフを押さえて見

大坂 小松園
 荷かざりへあれもこれもと母の欲

大坂 小松園
 荷かざりも出来ぬ手狭を言訳し

大坂 小松園
 嫁さおくれの娘へ荷かざりの通知くる

大坂 春 葉

仏壇の部屋に荷かざり明るすぎ
 荷かざりを中風の祖母に指図され

高橋 静 馬
 荷かざりのわりに娘がひき立たず

高橋 静 馬
 荷かざりをやめて現ナマ呉れと云う

大坂 梅 里
 荷かざりの月賦でないことほめかし

大坂 梅 里
 荷かざりをご用聞きにも見てもらい

大坂 梅 里
 荷かざりを見て来てうちの娘もはたち

大坂 梅 里
 荷かざりへ家が傾く娘が続き

大坂 梅 里
 荷かざりに優勝盃が巾をとり

大坂 阿 茶
 荷かざりに母の神経ゆきときき

大坂 阿 茶
 百姓が好き荷かざりにすげの笠

大坂 阿 茶
 荷かざりを8ミリで撮るうれしい日

大坂 阿 茶
 荷かざりへメモとっている母娘づれ

大坂 阿 茶
 かざるほど荷のない二男坊の嫁

大坂 阿 茶
 荷かざりは伯母の指図のままならべ

大坂 阿 茶
 荷かざりの日まで勤めは続ける気

大坂 阿 茶
 親ごころ足りないままの荷をかざり

大坂 阿 茶
 荷かざりへダイヤの指輪のおきどころ

大坂 阿 茶
 荷かざりに眼と眼でケチをつけており

大萬川柳ベストテン (十一月現在)

一 梅 里 二四、〇 大坂

二 小松園 二一、〇 大坂

三 静 馬 一九、〇 高槻

四 きさ子 一八、五 岸和田

五 晃 里 一五、五 大坂

六 桃 里 一五、五 笠岡

七 好 郎 一五、〇 泉北

八 多 志 一五、〇 西宮

九 宗太郎 一三、〇 石川

一〇 柳 志 一二、五 大坂

一一 美 房 一二、〇 富田林

一二 春 葉 一一、五 大坂

一三 章 雅 一一、五 大坂

一四 阿 茶 一一、〇 大坂

一五 圭 太 一一、〇 羽曳野

一六 方 大 一〇、五 倉敷

一七 清 人 一〇、五 布施

一八 文 秋 一〇、〇 大坂

明

け

ま

し

て

お

芽

出

と

う

ご

ざ

い

ま

す

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

忘年川柳大会 (大阪市)

12月6日 午後1時
会場——千日前 自安寺

全国民の声援をうけて、東京オリンピックが盛會裡に終了した思い出の年、躍進又躍進の思い出の年一九六四年よサヨナラ……。本年掉尾の句會大に予期通り賑やかなこと、賞品も盛沢山の寄贈で目を見はらせる有様。

トップを切つて若本多久志氏の挨拶は、自分の経験から作句した一年間の句数、其の内自選した句数、一路集の選をした時の感想などを混えて年末の挨拶があり、西尾榮の柳話、かつて、本社の名司会として絶讃を受けたベテラン丈に話振りの鮮かなこと、ユーモアたっぷり、ヤヤコシイところは調べた文獻を朗読する懇切ぶりで大好評。続いて、支部対抗句會に移り、ベテラン清水白柳氏が軍配役、遂に優勝者は杏林川柳會の福井野迷路氏、準優勝者は明和病院川柳會の海士天樹氏の獲得するところとなり、雪月花句會は、花組の大勝で雪、月を押し切った。席、兼題の披露に移り、流石忘年句會らしい佳句が出現、聞く人をし

てうなずかせるさまは、歳忘れ句會でもある。天の天は新鋭橋高薫風子氏の句に輝いた。

因に、秀句には豪華な賞品が授与されたが、その寄贈者は、若本多久志、大坂形水、松江梅里、山川阿茶、西出一栄、福井野迷路、林宏子の諸氏で茲に深甚の謝意を表する次第。

午後五時開かれた忘年懇親宴のトップは酔わぬうちに丸紅川柳會の村田瓢太氏の奇術でいつも乍らの素人離れの鮮かさ、続いて、女サンの美声、好郎梅里の兄弟コンビは、漫才でなく千里眼、それから、自己紹介とその人の隠し芸、他所行きの声で、今日は、ちよつと悪い声でと、色々飛び出す和やかさ、良いお年をときぬ別れを惜しんだのは午後七時。

(摩)

出席者——路郎、摩太郎、多久志、素人、市郎、満潮、圭井堂、瑞歩、白溪子、たつみ、柳宏子、白柳、春巢、三司、泉陸、季賛、すすむ、久美子、梅里、天樹、一栄、清子、志津子、すみれ、舟遊、狂二、清人、文秋、滋雀、愛二、野迷路、静馬、いわを、瓢太、あいさき、花梢、八郎、好郎、金三、一栄、いさむ、雄声、専翁、阿茶、幸雄、一舟、萬来、みさ子、凡太、句菜坊、有子、薫風子、進之助、庸佑、古方、女、霞乃、宏子、

兼題「蠟」 麻生路郎選

蠟のテクニクつねつたういり どんたく
媚た目へころの紐がゆるびかけ 釣童
社の電話媚びられてる慌てよう 与志
万遍に媚びて嫌味のないマダム 章雅

外交史妓の媚も入れ裏話 八九寸
媚売れど心は売らぬと我に云い どんたく
媚などという字忘れた子 沢山 千夏
うら若くアメリカナイぞとやらで媚び 真砂
媚びる目にボーナス袋の空を見せ 宗義
ホームバー媚びたる妻の後怖わし 三千弘
つまらない媚へたばこをふかすだけ 秀夫
女だねこんなベビーが媚笑い 柳女
通訳はなしでも媚態通じ合い 清人
オッサンと故意に言わせて媚をさけ 真砂
媚を売る生活に慣れた肌の荒れ 滋雀
媚を勝手にOKと判断し 古方
人の口気にせぬ媚で今日の椅子 庸佑
媚る瞳がほんとに燃えて怖くなり たつみ
腕によりかけて媚びても乗ってこず 幸雄
一対一媚びることなど考えず いわを
好かん妓の軽い媚にもぞげ立ち 好郎
誰にでも売る媚なのうぬぼれて 一栄
ホステスの媚よろめきの第一歩 花梢
そろ／＼とお金の欲し 媚に変え 多久志
媚びられて男の馬鹿をさらけ出し 春巢
媚る目にみがきをかけた十二月 たつみ
エプロンをつければ商売としての媚 雄声
着こなしが媚びてるように芸者出来 宏子
才女だがちつとは媚もはしおます 八郎
ワインクのこつもおはえて夜の蝶 あいき
来てくれな死んでしまふとんだれる 雄声
口先で媚びてマダムの瞳は光り 柳宏子
媚びつつけつて定年来てしまひ 文秋
金故の媚と知りつゝ、又かかり 一舟
泣きじゃくる女に媚を意識する すむ
媚びることもう知っている幼稚園 幸雄
金策へ女史も媚態をちらつかせ 女
老教授学生好きで世に媚びず 静馬
陣笠は陣笠なみに媚 満潮

媚びられて一厘下げた支店長 圭井堂
媚びられて年甲斐もなくうたえる 清子
媚びる目へけりつける金ばんと投げ 泉陸
媚売った人だが今は賢夫人 圭井堂
倦怠期媚びを忘れた顔になり 梅里
ビジネスと媚を割り切るホステスの 八郎
媚売って儲けた人が令夫人 摩太郎
媚びるコツ十分仕込む姉芸者 阿茶
子を負うて女給媚を忘れてず 好郎
ホステスは媚びる技巧も教えられ 文秋
あるだけの媚態は髭をいじりだし 照平
媚を売る替え唄となり座が乱れ 白柳
流し目も上目も出来ず妻は老け 多久志
グイボーイの媚態背筋が寒うなり 満潮
大臣の媚モーニングが泣く 素人
終電車媚に疲れた眼を閉じる 庸佑
天真らんまんお乳なぶつて母に媚 八郎
出産日父看婦へ少し媚び 梅里
兼題「夜風」 北川春巢選
千鳥足夜風と酒量まだたしか 三千弘
懷はマアマア夜風苦にならず 照平
呑みたいがボツトまでが夜風吹く 素人
船の旅夜風にふかれてるふたり 庸佑
逢うて来た頬は夜風を感じない 八郎
戸を叩く夜風帰えらぬ娘を案じ 梅里
心よい夜風が撫でる お堀端 榮
独り寝の窓を夜風がたたく音 狂二
貫い風呂夜風へねおそれ帽子 阿茶
残業が夜風の冷を持って去に 白溪子
出帆の汽笛夜風に乗って来る 素人
思い切れと夜風に待てば囁かれ 滋雀
医者呼びに走る夜風は言うれず 清人
山の湯の夜風をはめる窓をあけ 榮
お別れの握手夜風に身にしみる 女
淋しさに負けて夜風にあらたて来 同

店番に無口勝手に見て廻り 久美子
 店番の娘がお目当ての煙草買ひ 瓢太
 店番の子供小ぜにをよくさばき 瑞歩
 店番も顔まけしてゐるねだりよう 好郎
 店番どころか推理小説佳境なり 多久志
 近所火事店を留守した顔も見え 滋雀
 不景氣を云う店番の一人ごと 舟遊
 店番の閑を読んでゐる性の本 素人
 店番が男でたばこ買わずに來 素人
 店番の髭の返事の愛想なし 素人
 店番も我が子にはなし勞基法 清人
 郵便屋にあててあり店番かうでゐる 同
 信用を買われ店番頼まれる いさむ
 店番が内職してゐる程さびれ 文秋
 店番もなく自動販売機 清子
 店番に勝手が違ひ妻の留守 すすむ
 店番を客に頼んで昼食にする 柳宏子
 店番をたんで出たのに落ち着けず みさ子
 たまにする店番道を尋ねられ 市郎
 店番の今日ひもらしい毛糸編む いさむ
 酔うたのが來て店番をまごつかせ 季登
 店番に聞かれたくない赤電話 清人
 物騒な記事に店番落付けず 柳宏子
 店番へ指名手配の男立つ 満潮
 店番をくし引にする日曜日 久美子
 店番がいち／＼奥へ聞きに來る 静馬
 店番に監督と云う役もあり いわを

川 雜 婦人友の会十周 年記念句会 (大阪市)

兼題「P・T・A」 山川阿茶報 阿茶選
 P・T・A母のない子が淋しう 春栄
 寄附でも選挙でもめるP・T・A 同
 P・T・A 芦屋・ガムのカヤダンク 女
 ばねて 出来ぬので行くP・T・A 同

P・T・A酒のけいこもする役員
鈍才の子にP・T・Aの役がいや
父親参観マドロスのババもつかせ
P・T・A新人先生緊張し
入園のトタン委員を命ぜられ
P・T・Aインスタントの日がつづき
P・T・Aがたり今月赤字なり
運動会P・T・Aもあり出され
P・T・A子の成績が気に掛り
寄付の話になってP・T・Aもある
P・T・Aうちの子供は手を上げず
P・T・A世間のうわさするところ
お節りに誘われP・T・Aの和服ショー
P・T・Aにも制服欲しい参観日
P・T・Aさあまず弁に気が疲れ
先生に抗議ある日のP・T・A
盛装で今日は出かけP・T・A
P・T・Aあとは役員飲む話
行商の母もひとことP・T・A
P・T・A夫の顔を笠にきて
P・T・Aいつも決った顔ばかり
先生へ御義理来まじP・T・A
本論に遠くかしましP・T・A

佳句

P・T・Aしょうとらしく着て出かけ
気兼ねなくても出なげんP・T・A
口紅を落して母のP・T・A
P・T・A殿下と組んだバ走り
P・T・A・A少年に悩まされ

夢選

七五三妻の晴着に子の晴着
七五三可愛い、女の子が欲しい
つゝがなく育てと祈る七五三
父親もカメラもともする七五三
七五三晴着のかけて泣く亭主

阿茶
みさ子
徳子
千夏

同車
みさ子
富士子
一栄
良子
徳子
勝子
清子
一栄
操子
周甫
一栄
きさ子
千夏
あいき
同夢
酔夢
良子
操子
富士子
きさ子

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代

名古屋 市昭和区村田町 2 (88) 9069

兼題「ひとり」

ひとり身の友をうらやむ倦怠期
がめつうに蓄て身寄りもなき孤独
荒れ寺にひとり尼僧がいるばかり
たった一人の彼女が僕を春にする
ひとりいて心のまゝがありがたし
ひとりきりになって通知簿ゆつくり見
残り火をかきたてながらひとり呑み
ひとり居の昼は茶漬で済ましとき
ひとりでもべんちゃらされる選挙前
恋を知り娘ひとりになりたがり
ひとりすむ下宿へ友がをしかける
忍びよる秋の孤独を照す月
厳守した時間ひとりも来ていない

佳句

ひとりべめしたが良心承知せず
友情がひとりになってごみあげる
ひとりいて淋しい影の見えぬひと
ひとり来たもみち余りに赤すぎる
ゆく／＼はひとり立ちさす叱りよう

兼題「宝石」

七〇のまだ宝石にある未練
えい石やと云われてそれから大事にし

一栄選

清子 あいさ
春栄 勝子
阿茶 勝子
一栄 徳子
良子 きさ子
お勝 阿茶
悦子 富士子

形見だけ残し宝石みんな食べ 操子
金策に来てダイヤうたがわれ あいき
にせ物ぢやないかと顔とくらべられ 周甫
へそくりに内職足して買うダイヤ 良子
宝石の魅力公金つまみ喰い 富士子
美しい指が模造と気付かせず きさ子
七五三宝石づくめで妻は出る 女
宝石は宝石らしい光りよう みさ子
宝石はないが子宝だけがあり 春栄
衣装見せに宝石目立つとこへおき 徳子
宝石はガラスばかりのフィナーレ 春栄
宝石に手がとゞいたらはげかけて 良子
一カラット全財産を指にはめ みさ子
宝石ばかり大事に育てた子が叛き あいき
小紋着てダイヤヒスイに替えて旅 操子
眼のさめる様なヒスイは亡母のもの 阿茶
宝石の魅力一生棒に振り 勝子
宝石は持たぬがブライド持つてます 清子
念願のダイヤに白髪ついて来た みね子
宝石に縁なし庶民今日を生き 酔夢
パーティーの灯に宝石は満ち足りぬ きさ子
眼をむいた様なダイヤへ袖をひき 阿茶
宝石はイミテーションでいい若さ 酔夢
宝石を恋うは女である限り 同
いつの日か形見になろうと買うダイヤ 良子
ひかんでるのかダイヤの指がよく動き 良子
宝石に似た灯楽しむ旅の夜 富士子
飾くれた指をいたわる二カラット 操子
誕生石四月と聞いて小粒にし みね子
宝石に縁なき暮らし船を刈る きさ子
プロポーズすれば宝石買えと云い あいき
水入らず宝石なんか要らぬ日日 春栄
満たされぬ心へダイヤの冷めたい日 清子
兼題「我まま」 きさ子選 周甫

我まゝを通せる頃は夫はなし みね子
老人の我まゝ、理解する嫁が居り 勝子
我まゝ、な子の躰から家がある 酔夢
我まゝ、なおひとでしと七回忌 徳子
我まゝ、を祖父母のまじにてもめる 清子
我まゝ、が猫をかぶって見合する 一栄
我まゝ、を叱ってくれる親がなし 操子
我まゝ、な子を手放して母案じ 春栄
我まゝ、もすきているのに別れかね みさ子
佳句
亭主関白もう通されぬ子の背丈 清子
我まゝ、なとこは傷だが芸達者 徳子
我まゝ、を許し家計を任せ切り 勝子
母の留守我まゝ、通らずおとなしい 同
我まゝ、を云わなくなったと淋しがり 良子
そこまでは我まゝ、ですとすりあわす みさ子
我まゝ、だった子が真つ先に来てくれる 良子
我まゝ、を聞いてやらなな寄つつかず あいき
生一本わがまゝ、だけどもまが合い 阿茶
我まゝ、に育ち世間は甘くなし 春栄
兼題「読書」 良子選
図書館の列長々と秋深む 春栄
美容室の釜でおしやれの本を読み 操子
週刊誌読んで宿題まだ出来ず 同
声出して笑って父は漫画読む みね子
秀才型趣味は読書と言う入試 春栄
週刊誌しか読まぬ夫となり すみれ
孫が来て中途半端で本を閉じ 一栄
秋深く読書する子へ羽織らせる 同
本代に読書の秋をアルバイト 千夏
ベストセラー読書熱をあかり立て みさ子
趣味読書などと小説ばかり読み 徳子
満員車吊皮で読む外語の書 勝子
老境の読書一つでひまつぶし みさ子
借り本は電車の中でも読み急ぎ お悦

読書好き又近眼の度がすゝみ 阿茶
一頁もう一頁が夜を更かし 清子
縁談へ趣味は読書と添えておき 徳子
読書する子へ炊事気兼ねする 清子
声出して読む一年の得意がり 周甫
子沢山物干台へ逃げて読み 勝子
燈火親しむ宵を漫画に読みふけり あいき
授乳する妻の片手の育児本 同
嫁く日周近料理の本ばかり読み 同
読書好き妻は理つめて押しまくる 酔夢
老いてから読書三昧したい夢 同
川維 阿倍野支部句会(大阪市)
金井文秋報
同じ生地だからどちらも振り返り 良
冷やかな父の言葉にあるぬく味 静馬
正気かと踊る阿呆を観るあほう 梅里
冷なまに一度でもよい貸せる身に 圭井堂
役員にされそう文句ひっこめる 文秋
正気に返れば心に穴が開いてた 清子
洗い流せば元の白生地 小松園
賞めるにも課長文句をつけたがり すゝむ
脳病院正気へ見せる広告板 滋雀
手ざわりはどうせ買えない生地と知り 柳志
酔うほどに正気になって悪い酒 恭太
好きなだけ文句を云えと又値上げ 好郎
お見事なジョウキへ少し生地が出る 市郎
文句言うことと背丈が伸びただけ 白柳
又文句狸寝入りをしてこまそ 痴亭
小心な人の文句はボヤクだけ 金三
人前は冷たく云うて目で笑い あいき
出るものは喰う文句を云うて去に 幸雄
愛たしか冷たいことも云うて見る 凡子
晩年の恋は正気と見てくれず 静波
正気では出来ない賭も意地 一舟

文句あるなら素面で来いと取りあはず 一栄
酔眼の出合頭に課長の目 天樹
段違いの腕下請けが買いに来る 清人
すてられてやっと正気を取り戻し 八郎
よいカモと出合頭につれこまれ 双楽
文句屋で通り会社の生字引 万里
出合頭思い出せずにはふり返り 好子
文句だけならべて質屋押し返し 宗義
川維 玉造支部句会(大阪市)
西出一栄報
目に入っても痛くない子に自殺させ 志津子
朝帰り瞳の奥を妻さぐり 正彦
なくあんたにすがりうすく輪切りにする 白柳
愛の手紙切手貼るにも心して 八郎
果汁より通らず身内呼びはじめ 文秋
生きては食えぬ果物供えられ 一舟
辻賭博一度やったらひっかかる 三時
かけ釣りの休む間もない恵美須顔 寿美司
ひっかけて大物らしい刑事部屋 六竜子
趣味多い夫でシーズン切目なく あいき
着くものシーズンラッシュ時を避け 一栄
シーズンが来て二軍へ春が来ず 金藏
桜貝手に哀愁をただよわす 章雅
哀愁の歩みへ落葉音をたて 清子
哀愁のさなへチンドン屋が通り 滋雀
芸のずれ場末の客ももう湧かず 珠笑
暮切れの哀愁相手に流される 柳宏子
川維 京都支部句会(京都市)
田中鳥雀報
吊り皮に耐えて庶民に夢 乾く 和三郎
枯草の色して虫の耐えている 紫蘭
耐えるだけ耐えてきた落鮎の生 ゆきら
愛のむ耐る度あを知って打ち 句楽坊

一匹の値段がきんぎょについた胡麻
さんま焼く男の足が鼻緒をかむ
さんま買うて柿を取つて下通る
弁当箱さんまの面がにくめない
利息で喰べらるる額を計算して
四面楚歌郵貯の利息妻に聞き
頬杖は髭でも剃ろうかと思ひ
川雑 大聖寺支部句会(加賀市)

川雑 大聖寺支部句会(加賀市)

野村味平報

一札を入れて無理な工面をし
一万円札月給袋をうすくする
札束を切つて温泉宿にあやしめ
不服の子が居てジャンケンやり直
なにことも不服だらけの不倅
不服でも上役相手て引き下がり
川雑 備前支部例会(岡山県)

川雑 備前支部例会(岡山県)

横山一声報

民族も主義も五輪へ手を握り
オリンピック上には上があるを知り
オリンピック勝つたい顔ばかり
オリンピック今日の丸のよきを知り
もう見えぬ五輪へ曲つた腰が伸び
オリンピック画面に競技教えられ
オリンピック東も西も手をつなぎ
この一秒メダルを賭けて奮闘し
国中がオリンピックで色どられ
オリンピック試験の子供落着かず
オリンピック市街図変えた大工事
四年目に逢ふ日を誓ふ金メダル
オリンピックに乗つて子が生れ
オリンピック見たら死んでよいと言
オリンピック母もスポーツわかれ
うなだれし稲穂も聖火迎え入れ
オリンピック農家の出足を遅らせ
オリンピック選手村にも菊の花
鈍子まで横目でにらむ二日酔
障子貼り祭りが先に来た気分
川雑 大阪通信病院川柳会(大阪市)

親子孫三代動いた掛時計
聖火消えたと病入らしくなり
芳月
川雑 大鉄支部句会(大阪市)

辻白溪子報

遠慮ない声にこだまも遠慮せず
気の強い女の眼鏡よくひかり
高山寺へ来て紅葉も賞め杉も賞め
しめ縄の松は紅葉へ顔と青
高山寺杉の高さへ陽がかくれ
ハイカーの歌こだまする山の宿
さあ出発リツクの心持より重さ
寺一回りして来た縁の陽のぬく
注連はつて見上げて梢に秋があり
川雑 木次支部句会(島根県)

藤井明朗報

へんくつといわれて腕の牙を見せ
へんくつと添うて金婚式を上げ
へんくつといてクイズの鍵が解け
へんくつの一機嫌今日も鍵が解け
へんくつで通してくれる友があり
へんくつの強み小銭を貯めている
へんくつの小言馬耳東風で聞き
もみじ寺につぼんの秋に見る
へんくつは老妻の死にあぜんとす
へんくつは人のする事に入らず
へんくつな男にあった温たかみ
谷川の流れにもみじ乗って来る
蜜柑山もみじ調和し紀伊の旅
趣味同志へんくつとこよう似てる
一枝を手にもみじバスの中
川雑 大阪通信病院川柳会(大阪市)

森下愛論報

秋晴れをまず仲人がうれしが
秋晴れに日傘くるく立話
手術して降らせ厄介あつかい
厄介なコレクシヨンはもてあまし
やんちゃした子の退院に手を叩き
番

アベックの招待切符に頬を染め
いとはんの恋招待日から芽ばえ
秋晴れの休み電鉄えびす顔
招待をうけて女の着る話
川雑 南海電鉄川柳会(大阪市)

辻圭水報

よく効くとビタミンを売るやせた人
下座から出た本調子見直され
ばあさんはあの世が怖いハイウエー
ハイウエー私の車ははずかし
ハイウエー新車売込む種になり
ハイウエー今さら中古がめしく
ハイウエーこころあたりは古戦場
ハイウエー彼女に腕の見せどころ
ハイウエー又あちらでは聞かされる
路郎

富柳会句会(富田林市)

阿部柳太報

おいらくの恋にも手相見てもらい
キユーピットとまじい恋をさせ
おいらくの恋文堅い候文
老いらくはもう寝たはる午後七時
孫が来て帰ったあとの白髪
女客のおせじ隅々ゆきわたり
釣り銭をお世辞の分と云う目那
云いにくい話にこえが媚びている
広告に奥様向きとアルバイト
花チヤンがゆくから私もアルバイト
アルバイトパートタイムで手がきれ
久し振りにアヤアヤアヤで事わり
これかまあ初恋の人久しぶり
美房

あすなる川柳会(大阪市)

山本素郎報

新札に両替をしたためたい日
好郎

同窓会宅もゴルフでござあます
子が出来て相談されても仕方なし
両替も銀行札を言うて出し
相談はまずあとにして酒を酌み
両替に足らぬ分だけ買わされる
はつたり先ず本人が酔うており
お隣りのいはれし母の笑い声
両替の損は覚悟で子に頼み
相談がまとまりそうて酒を出し
梅里

城北明老会(大阪市)

田中風柳報

かすむ目で砲丸投で金メダル
スポーツで鍛えた根性物をいい
スポーツは勝つためてなく負けて泣き
スポーツ店買えぬスキーつなで居る
勝敗がききまてスポーツマン握手
スポーツマンだけが知つて居る涙
スキーヤー雪のない日の炬燵
オリンピック済めば嫁入り女子選手
スポーツのルール知らず手をつなぎ
スポーツの力世界を一つにし
スポーツの好きな子供にたい掛け
スポーツの話が出れば座りかえ
メダリスト筆持つ手にも親しめ
秋の魚焼く煙が秋を告げ
停年も失業も無いくず拾い
清志

宴会・出張パーティ・折詰井当

梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇

TEL(三三)三九三五番

(三三)七七八二番

館の店 アベノ橋近鉄地下食通街

TEL(三三)〇一四七番

串の店 南区豊屋町三ツ寺セ

TEL(三三)九一八四番

柳樽室

路郎生



2月本社句会予告

橋片抱 呼び拾て
下隅く

ある。京
都や東京
に方言が
あると
か、ない
とかの議
論するの
が目的で

★私の旧作に、「元旦だせめて眼鏡を拭きましよう」というのがある。本誌のために、悪戦苦闘を続けていたこの句だ。いまま悪戦苦闘に変わりはないが、せめて元旦だけでも、忘我の時間を持ちたいものだ。★本誌も、本号で一九六五年に踏み切った。アベベには競技の上でのゴールがあるが、私にはそれがない。スモッグを突き破って、別世界に出たと気がついて、そこが極楽か地獄かであろう。柳友よ。それまでのご支援をお願いする。★編集局で、アンケートのテーマが要るというので、全国の柳友に、貴地の方言をとり入れた句を、(なるべくいい句)知らせてもらったらという案でお願いしたら、京都の幸男君から、京都には方言はないという回答、東京の三味君からも、東京には方言はないという回答。これはアンケートに関する説明が足らなかつたのである。京

はないので、幸男、三味両君のせつかくお知らせ下さった回答は発表を控えさせてもらった。中には方言句が見当たらない。こちらでは方言らしい方言もなかったが、いう回答もあったが、それらは全部省ぶかしていた。だいた

新春を賀し奉る

麻生路郎 麻生路郎 北川春巢 川村好郎 戸田古方 清水白柳 真鍋一瓢 橋高薫風 浅川八郎 菊田いきむ 西田柳宏子 総務部 八木摩太郎 林宏子

いろいろお手数をかけたことを恐縮している。方言に興味を持ち、方言と川柳のことに関しては、やはり自分でコツコツ研究すべきもの

である。以前の私なら、自分で全国をかけずり廻ってやるつもりだが、それをやるには、足が不自由だという第一障害にブツつかった。親しい柳友の力に頼ろうとしたのが間違の元であった。くればれもお詫言ひ申し上げる。★次に原稿が少しく幅狭したので、阿達教授の「江戸川柳と紋章」を次号送りとしたことを筆者及び愛読者にご寛恕をお願いしたい。★三条東洋樹君が、「時の川柳」誌上で、編集者との対談記事中に、本誌の編集方針に少しく触れていられたが、斯うした理解のある人たちに読んでもらうことは多年編集に腐心しているものにとってはラッタの背からオアシスを発見したようなよろこばしさを感ずるものである。全国の柳誌を見渡すと、投句マニアのごきげん何がいかに雑誌を出しているようなものを見受けるが、せめて柳誌を出す以上は、出さだけのメリットを持ちたいものである。どこの雑誌が判らぬようなものもあるが、もっと地方色を出してもらいたいし、句の上の主義主張も堅持する必要があるし、文学としての川柳の向上にも意を用いてもらいたいと思う。その点、忘れても青竜刀君の云い草ではないが、紙とインキのムダ使いはしないことである。★年が新らたになったのを機会に健康で、川柳第一主義で精進して下さることをお願いしてベンを握く。

時、題、松・益・値上げ、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★がみ句会・7日(木)午前十時、題、巳(蛇)・新作・祝杯・焦れ・新春雑詠、所、池田吉心居、★南海電鉄句会・21日(本)六時、題、働き手・役得・声・所、難波高架下親和クラブ、★阿倍野句会・20日(水)六時、題、初一念・首・入口・新しい、所、アベノ区松崎町三ノ一〇割烹大萬、★玉造句会・11日(月)六時、題、一と役・新人・めし、所、市電玉造南一〇〇米大阪信用金庫、★京都句会16日(夕)、題、足痛・猪口・大胆、所、上京区相国寺北門前町上ノ町妙庵

川柳雑誌社主催 本社新春句会

日時 一月七日(木)午後六時
会場 自安寺(妙見さん)電話四一四七八番
兼題 「しつけ」二句 麻生路郎選
「逢う」三句 菊沢小松園選
「一本槍」三句 戸田古方選
「首相」三句 吉田圭井堂選
三題当日発表
席話 麻生路郎
表彰 昭和三十九年度不朽賞優勝者
一カ年間本社句会全出席者
短冊交換会 有志の方は各自一葉ご持参
呈賞 各題天位・各題天位を路郎選により天位に不朽賞。
会費 百円
★投句だけの方は郵券三十円封入(メ切は一月五日)本社宛。

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック

積水化学
本社 大阪市北区岸星町1

大阪 戎橋 北極星直営営業所



戎橋 北極星ビル
 白浜温泉 やわらぎ 白浜温泉 三三七五
 大正橋 やわらぎ 三三六七
 永楽橋 やわらぎ 三三六八
 野田阪神 やわらぎ 三三六二
 野田阪神 パンヤの食堂 三三六六
 ぐまた町 パンヤの食堂 三三五五



初 南海沿線 詣

住吉大社...住吉公園下車 50円
 水間観音...貝塚のりかえ水間 320円
 東照宮...和歌山市から電車 420円
 紀三井寺...和歌山市から電車 420円
 大鳥大社・方違神社・百舌鳥八幡宮
 △運賃はいずれもなんばからの往復です▽
 お問い合わせ
 (641)8686
 (716)8661
南海電鉄

C・M・C 児童音楽サークル

種目

チエロ・特設バレエ科
 バイオリン・ピアノ・声楽

千林教室
 大阪市旭区北清水町九六
 あびこ教室
 大阪市住吉区南住吉四ノ一
 西九条教室
 大阪市西九条
 生駒教室
 奈良県生駒町北新町

北清水集会所 バイオリン科
 あびこ幼稚園 バイオリン科 電話1874
 防犯会館 バイオリン科 電話9836
 文化会館 生駒2027

主 宰 麻生アイト
 奈良県生駒町生駒本町一〇三
 ★サークルに関するお問い合わせは下記へ
 電話生駒(〇四三七)二〇二七

Printed in Japan

発行所 **川柳雑誌社**

電話大阪(671)六〇八一
 阪神二座大阪七五〇五〇番

大蔵市住吉区西内万代西五丁目二五番地
 行印刷人 麻生幸二郎
 編集兼発行人 麻生幸二郎
 昭和三十九年十二月廿五日印刷
 昭和四十年一月一日発行
 大蔵市住吉区西内万代西五丁目二五番地

川柳雑誌 第四十号
 定価 一〇二〇円 (送料六円)

半力年 七五六円 (送料六円)
 一力年一、四四〇円 (送料六円)

禁転載
 昭和三十九年十二月廿五日印刷
 昭和四十年一月一日発行

投稿規定
 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名
 雅号を明記する事。
 「近作柳」は一般作家の雑吟を募る。
 「課題吟」「方円帖」は誰でも投稿が
 出来る。
 「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

近作柳 (雑誌十句以内)
 方円帖 (雑誌十句以内)
 川柳塔 (雑誌十句以内)
 文 (評論・研究・感想其他)
 (一月十五日締切)

毎号募集
 川柳雑誌社
 麻生路郎選
 北村好郎選
 川村春樹選
 麻生路郎選

金儲け (十句以内)
 腰さん (十句以内)
 奥さん (十句以内)
 羽田 (十句以内)
 オール (十句以内)
 黒田 (十句以内)
 田中 (十句以内)
 島田 (十句以内)
 島田 (十句以内)

募集
 課題吟募集
 菊沢小松園選
 野村味平選
 西出一栄選
 黒川紫香選
 田中鳥雀選
 島田静馬選
 (一月十五日締切)

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和四〇年一月一日発行 (毎月一刷一日発行)

編集 堀江 三郎 発行 印刷 堀江 三郎

川柳雑誌社

大阪市住吉区西代西五丁目一五番地 電話大阪(671)六〇八一

振替口座大阪七五〇五〇番

定価百二十円(送料六円)

あけましておめでとございます

各国でアスパラギン酸製剤が活躍ノ
今や健康薬は、新しい時代を迎えよ
うとしています。

ことしも、毎日のアスパラギン酸
カリウム、マグネシウムのアスパラ
常用効果で細胞を活性化し、はんと
うの健康体をおつくりください。

いつも健康でありたい方 はやく回復したい方へ

アスパラ

●疲労回復 ●心臓疾患 ●肝臓疾患 ●妊娠中毒 ●二日酔い ●神経痛 ●腰痛
●食欲不振 ●便秘 ●病中・病後の回復 ●疲れ目 ●手足の脱力感 ●湿疹

120錠 500円
300錠 1,100円
アンブル 100円
ドリンク 100円

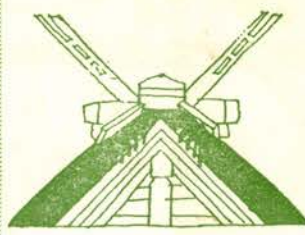
弘田三枝子



アサベ

近鉄特急2階電車で 日本の氏神さん初詣と伊勢志摩初旅

お伊勢さん初詣



伊勢市駅または宇治山田駅下車 外宮・内宮バス増発
近鉄初詣特急増発
大阪上本町から
京都から(八木駅のみかえ)2時間22分
名古屋から
特急1時間52分
特急1時間28分
片道630円
片道830円
片道580円
(いずれも座席指定特急券とも・L・Jも半額)

伊勢志摩スカイライン・鳥羽コース
定期観光バス：回遊約6時間
カイド・おみやげつき590円
定期バス：伊勢市・宇治山田駅前・
内宮前・スカイライン・鳥羽
片道220円

お問合せは………
771 8551
37-8655
57-2531
大阪 京都 名古屋

近鉄



一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
林式会社 本嘉納商店
神戸・灘・御影